悲鳴と共鳴と汚れた魔剣

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悲鳴と共鳴と汚れた魔剣

【Nコード】
N3867T

【作者名】
月島　真昼

【あらすじ】
異世界に召喚され、ファンタジー世界で魔王と戦うことを命じられた――、あとのお話。半年前に大天才だが引きこもりの魔術師であるカイセルの代わりに魔王を倒した勇者、アイバは親友のリグムと共に魔王軍の残党を討伐に向かう。けどなんか様子がおかしい？
　魔物の数は尋常ではなくて、親友がいきなり――　※作者は「されど罪人は竜と踊る」に多大な影響を受けています。パクリにならない範囲でがんばりたいです。ってか魔法の設定が被るのは許してください。

空の王座と召喚士の悲鳴　１

――いったいいつまで殺せばいいのか。無論自身が死ぬまでであることを私は知っている。

風の騎士　ガーレ＝アーク

朝の陽射しが窓から差し込んで、くそ広い客間で俺は目を覚ました。天井が高い。柔らかいベッドから体を起こす。癖のように首を振るが、硬いベッドで眠っていた昔と違って、首の骨がバキバキと鳴ったりはしなかった。もう召喚されてから半年も立つのにいまだになれないなぁ……。

姿見の前に立ち、肩を回し、一通りに体の部位を伸ばす。特に異常はなかった。

「……よし」

体は軽かった。筋肉に疲労は残っておらず、どこにも痛んでいる場所はない。

控えめなノックが二度扉を打った。

「アイバ」

「鍵は開いてるぜ」

記憶にある貧相な部屋と違って、ここの上等な金具は音を立てずに導きいれる。窓から入る陽の光がそいつの端整な顔を照らし出す。光を帯びた水色の髪。エメラルド色の瞳。背丈も百八十センチはあるイケメン。

このイケメンの名前はリグム＝フェン＝ナイトロール。

この国で最強と言われている魔術師であり、俺の親友だ。

「今頃起きたのか。出立は早いと伝えたはずだが」

「うるせーな。朝弱いんだよ」

「お前は変わらないな」
リグムは俺にしかわからない程度に微笑する。表情をあまり動かさないこいつには珍しいことだった。
「五分で支度してくれ。もう部隊の用意はできている」
「あいよー」
いい加減に返事をするとリグムは部屋から出て行った。
これから魔物退治に出る。部隊長で指揮者たるあいつにはいろいろとやることが残っているんだろう。その点、俺は気楽なものだ。誰かから与えられた力を振るい、ただ壊せばいいのだから。

勇者であること。

それが異世界から召喚された俺に与えられた役目らしい。俺は半年前に、魔王討伐のために召喚された。それに期待されていた魔術師である、リグムの弟が出撃を拒否したからだ。ちなみに彼の名はカイセルと言い、最強と言われるリグムすらはるかに凌ぐ魔力を宿して生まれた化け物のような魔術師だ。彼が戦えば魔王の撃破は確実だと言われていた。それをカイセルは「やだよ、面倒くさい」と一蹴して、代わりに俺を召喚したんだとさ。
そして俺は魔王を倒した。いまはその残党狩りを行っていて、北のほうに魔物の大隊が現れたそうだ。おそらく魔王の軍の残党の、最大勢力だろう。

俺は薄く、重さのない戦闘服に着替え、腰にベルトを通して剣を吊り下げた。白を基調にしたこの服をどうも俺には合わないなと感じる。どうせ血で真っ赤に汚れるのだから、暗い色のほうが好ましい。
部屋を出て、無駄に豪華で目がチカチカする廊下を歩いていると、向こうにカイセルがいた。
「よお、部屋から出てるのは珍しいな」

「ん……、」
カイセルは一瞬向こう側に走り去りかけて、留まる。
「なんだ、アイバか」
それから兄そっくりのテライケメンな顔で屈託のない笑みを見せた。
カイセルはいわゆる対人恐怖症である。俺とリグムとロットウェルと言う兵士だけは平気なんだそうだが、討伐戦の作戦会議場に無理矢理連れ出されて顔を青くして、最終的に机の上をゲロまみれにしたのは忘れがたい。
「寝癖ついたままだぞ」
「アイバもだよ」
「俺は別にいいんだよ。どうせ長距離移動で気にかけてる暇なんかないんだから」
「僕も別にいいよ」
「お前はダメだ」
せっかく見た目が超イケメンなんだから、勿体ない。
「めんどくさいなぁ」
ぼやきながら一応髪をいじくりまわして、カイセルはすぐに諦めた。
できないことはしない、のがこいつのポリシーなんだとか。
俺は溜め息を吐く。リグムの影響か保護欲かなんだかよくわからないが、俺はカイセルに弟のような感情を抱いている。できれば対人恐怖症のほうもなんとかしてやりたいのだが。
「ところでお前、なんで部屋から出てきたんだ」
「ロットウェルに追い出されたんだ。カイセルさんはタダ飯食らいでムカつくので働いてください、って」
……一理ありすぎて困るが。
この王宮が建てられたのは相当に古いから内装にはかなり金が掛かっている。が、ちょっと前まで魔王と戦争やってたこの国は基本的に飢えている。もちろん維持費だけでも相当な額が取られるが、

貴族ですら悪魔の影に怯えていてそれらの高価な内装を処分するのはさらに金が掛かってしまうのだ。
確かにカイセルのような強い魔術師を遊ばせておく余裕はないけど。
使用人が一人通りかかった。カイセルは俺の後ろに隠れて、地面にへたれこむ。耳を塞いで壁に額をくっつけたまま震えている。
「あ、アイバ様、おはようございます」
「ああ、うん、おはよう」
俺はカイセルのほうに薄く視線をやる。挨拶してきた使用人Aさんは「あ、すいません」とだけ言って、さっさとどこかに行く。
「カイセル、もう行ったぞ」
「ロットウェルもひどいよね……、僕になにができるっていうのさ」
まったくその通りだ。
「ねえ、アイバ。僕の部屋に遊びにこない？」
「悪いな。俺はこれから任務だ」
と、言い逃れ。
こいつの部屋に行ったら大体遊びと称して召喚獣との模擬戦をやらされる。ナイトロール家の長い歴史の中でもダントツで最強らしいカイセルの召喚獣は、ぶっちゃけ魔王より強い。軍の内部ではそんな危険な存在であるカイセルを暗殺する話も何度か出ているらしいが、リグムが反対しているのと、現実にカイセルを殺害できるだけの戦力が存在しないためいまのところ実行に移されてはいない。回ってくるとしたら確実に俺のとこだろうな……、ああやだやだ。
「ちぇっ、まあいいや。がんばってね！」
こうやって微笑みかけてくるところを見てると、ただの子供にしか見えない。
「おう」
俺はできるだけ自然に見えるように微笑を作って答えた。
今回は遠征ということで少数精鋭の部隊を組んだらしいのだが正

直ナンセンスだと思う。リグムと俺がいれば相手がどんな数だろうとほとんど意味はないのだ。戦闘に巻き込まれる一般人の保護とか言い出せば、今度は個人の質よりも人数が必要になる。俺は作戦の責任者は多分リグムではないのだろうなと思った。

案の定、兵舎に着くと知らないおっさんが演説を始めていた。

「おい、先に行っててていいか。バカバカしい」

「次期総統様の機嫌を損ねたかったら、やれよ」

リグムの許可が出たので、出ようとしたら、肩を掴まれた。

「言い方が悪かった。居てくれ」

「……わかった。つーか正直馬を使って呑気に行くのもだるいんだがな」

「お前の加速魔法には僕だってついていけないんだ。勘弁してくれ。単独で魔物の群れにかかる愚かさはよくわかってるだろ。お前が大丈夫でも若い兵士が真似しないとも限らない」

「自分が言ってることがおかしいことに気づいてるよな」

「ああ」

「魔物が出たのは、北北東に二百五十キロいったところだったか」

「そうだよ、帝国との国境に近いから、国境警備の兵も動いているけど、数が膨大すぎてどうにもならないそうだ」

「馬の足で三日か四日くらいか」

「……」

「俺一人だと一時間弱。いったい何人を俺が殺したことになるんだろうな」

「……アイバ」

「お前を責めてるが、ただの一人言だ。気にするな」

「わかった。僕が軍の上の席をぶん取ったら、改善する。けどその前に」

「なんだ？」

「寝癖、なんとかしろ」

町から外に出ると整備された街道が続いていた。あんまり同じ体勢で乗っているとケツを中心にいろいろしんどいので数分ごとに微妙に体勢を変える。
「落ち着かないのか、アイバ」
リグムが訊いて来るが別にそういう訳ではなかった。
「お前と一緒にするなよ。俺は戦闘で何万人死のうが全然気にしないんだ。環境さえ整えたら人間なんか勝手に増えるんだからな」
俺が言うとリグムはひどく痛そうな顔をした。リグムというのはいいやつなのだ。からかい甲斐があるとも言う。
「リグム様──」
兵士の一人が俺達のほうに馬を寄せてきた。赤毛を三つ編みにしている、あまり美人でない女だ。
「ロットウェルか。どうした？」
「もうすぐガンドラ平原ですよね。あたし、大炎壁みてみたいなぁ。なんて」
「却下」
「リグム様のドケチ！」
大声で言い放ち、馬の足を止めて後ろの兵士達のほうに下がっていく。
「ドケチって……、そういう問題じゃないだろうに」
「あっはっは」
ちなみに「大炎壁」というのはナイトロールの先代の長が敵国の最強と言われる「颪の騎士」ガーレ＝アークとの戦いの跡で、そのときアストナ＝フェン＝ナイトロールの放った炎の魔法が地面を深く抉り、
地中に眠っていた可燃性のガスに火がついて文字通りの「大炎壁」

となってガンドラ平原を両断しているそうだ。
「大炎壁なぁ。俺もちょっと興味あるな」
「アイバまで……」
　リグムは呆れたように額をおさえる。
　戦争中だった両国が突如生まれた大炎壁のせいで戦いを中断せざるを得なくなった、という経緯を聞けば、まあ誰だって興味くらい沸くだろう。
　何気なく振り返るとロットウェルが手招きしていたので、俺は馬の足を緩めた。リグムが気にかけてか俺を見たが、体勢を崩しかけて直ぐに正面に向き直った。あいつは操馬術が得意ではない。
「アイバ様ってガンドラの戦役には参加されたんですか？」
「ええと、」
　俺はそのときまだ召喚されてなかったんだよなぁ……、と思いつつそのへんの話はナイトロールの魔術師以外には喋ってはいけないことになっている。
「してないな。その頃俺は軍人じゃなかったし」
「そっかぁ、じゃあガーレ＝アークを生で見た人はいないんですねぇ」
　ロットウェルは肩を落とした。
「ん、リグムはどうなんだ？」
「何回か訊ねたんですけど、教えてくれないんですよ。なんか苦い顔して」
「へぇ。しかしなんでまた敵国の騎士なんかに興味あるんだ？」
「アイバ様、正気ですか。ガーレ＝アークですよ？　ガンドラ戦役の二万人殺しの。もちろんそれだけじゃありません。ダリルレイフの義勇軍から彼の伝説は始まり、軍職についてから負け戦の殿を務めて被害を食い止めたこと数知れず。前線にでれば負けなし。クロフェイル奪還戦では奇襲部隊を率いて王国の主力部隊の側面を叩き半壊に追い込む。
彼一人のために王国軍は辛酸を舐めさせられて、ついに出撃したア

ストナ＝フェン＝ナイトロールを一騎打ちの末に討ち破る。『ガンドラに吹く殺戮する風』と呼ばれて王国の魔術師共を震え上がらせた帝国最強の騎士！　例え敵でも一人の戦闘者として憧れるのも無理はないじゃないですか」

　ロットウェルはキラキラと顔を輝かせる。初対面の相手に馴れ馴れしいやつだなと思いながら俺は「そんなもんかねぇ」と相槌を打った。

「あ、もちろんアイバ様の魔王との戦いにも痺れましたよぉ。魔王の『火儘獄沁炎（カーゴグウン）』に頭から突っ込んだときはどうなることかと思いましたが、接近戦に持ち込んでからの『気計璃嶺流（キゼルフェセウ）』の三重発動に『速離源力（ソロバリク）』捌き、もう私、メロメロでしたよ」

「ああ、そう」

「抱かれたいくらいかっこよかったです」

「あっはっは。死ね」

「あっはっは。死にません」

　大口を開いて笑って誤魔化しやがる。

「でもまああんまり恐い態度とっちゃダメですよ。アイバ様って、ただでさえ恐い顔をしてるし、魔王なんて誰も敵わなかったのを倒しちゃうくらい強いからみんなちょっとビビっちゃってます」

「……」

「笑わないと人生損しますよぉ」

「余計なお世話だ」

　特に何事もなく俺達は順調に歩みを進めて、夜になった。俺達はキャンプを開き、テントを張った。

「で、なんでお前はここにいる」

　俺のテントに手荷物だけ持って潜り込んできたロットウェルに言った。

「だって基本的にこの集団、男所帯じゃないですか。私、好きでも

ない男と寝るほど軽い女じゃありません！」
うん、言葉の使い方を致命的に間違ってる。というか女も十人ほどいて、専用のテントがちゃんと与えられているはずだ。個室を使ってるのは俺とリグムだけだが。
「帰れ」
「ええー。せっかくだからいろいろと語らいましょうよ。ベッドの中で」
「帰れ」
「冗談はここまでにして、と」
ロットウェルは荷物から魔道書（グリモア）を取り出した。
「ちょっと教えて欲しいことがあるんです」
「お前って風向士なのか」
「いや、違うんですけどね」
苦笑しながらロットウェルは言う。
「風属性の魔法使いを殺す方法を、ちょっと」
……ああ、一応、精鋭部隊に選ばれるほどの技量なんだよな、こいつも。
対ガーレ＝アークを想定しているのかはわからないが、まあ一般的にそれを倒せたら英雄と呼ばれることは間違いないだろう。
「つっても風向士の俺に風向士の殺し方を訊かれてもなぁ……」
「ダメですか」
「うん、俺、お前らのこと信用してないから」
「へえ。敵対する可能性があるってことです？」
「もちろんこっちから表立って国家なんて面倒なものと戦おうとは思わないけどな」
「それは、仕方ないですね。じゃあ、お邪魔しました。おやすみなさい」
ロットウェルが出て行く。
……俺は召喚されてからずっと王国に身を寄せている。理由は生活が保障されているからだ。リグムがカイセルがいて、嫁も宛がわ

れて性欲処理にも困ることがない。
軍属で無くなれば、別に勝手に助けにいってもまったく問題ない訳だ。
「実際には軍属でなくなった瞬間に情報が入ってこなくなるから、なんにもできないんだろうがな。金もなくなるからどうせ傭兵紛いのことをやるんだろうし」
勝手な結論を出して問題を片付けた。
寝るか。

空の玉座と召喚士の悲鳴　3

夜襲の気配に気づいたのは別にテントに張り巡らせた『聴爾覚（キルルク）』の音波探知術式が発動したからではない。

なんとなく起き上がって、そんな気がしたのだ。数瞬遅れて剣と牙がぶつかり高い金属音を上げた。燃焼系術式が発動し、夜を漂白するのがテントの布越しにわかった。ギャン、一声鳴いて魔物が絶命する。今回の作戦に狩り出されてるのは精鋭揃いだ。普通の魔物程度に遅れは取らない。俺は、別に問題なさそうだったので、もう一度横になった。

朝になってリグムが起こしに来る前に、ロットウェルが半裸でやってきたのを叩きだそうか迷った末に、叩き出した。

テントから外に出ると、やはりというべきか十数体の魔物の死骸があった。

「昨夜起きてこなかったのは君とロットウェルだけだったよ」

と、リグムが俺を睨みつける。

「どーせお前らでやるんだろうが。勇者様に無用な手を煩わせるなよ」

ほざいてみたらリグムは心底軽蔑し切った表情で出発の準備に戻った。

「お前はなんで起きなかったんだ？」

服を着て出てきたロットウェルに訊ねると「え、爆睡ぶっこいてました。カルーが起こしてくれたそうですけど、揺すってもつねっても起きなかったんだとか」と朗らかに笑いながら言う。

「お前よくこの部隊に選ばれたな」

「あっはっは。まあ実戦ではそれなりに活躍するので」

相応の自信があるらしい顔つきだった。

まあ実際数人もいれば仕留めきれる数の魔物だったので別にロッ

トウェルが一人いなかった程度、問題ないようだが。
「あ、あそこで魔物の死体いじくってるやつがカルーです。軍には勿体ない美人っしょ？　紹介しましょうか？」
ロットウェルが指差した方向には、褐色の肌をした美人だが、うっとりした表情で魔物の腹には手を突っ込んではらわたを引きずり出してる。
「いいよ。俺は人見知りなんだ」
「遠慮しなくていいのに。軍の嫁にしたい女性候補ナンバーワンですよ」
「まじか」
軍の男って外見がよければなんでもいいんだなと呆れかえる。
「まあ嘘ですけど」
「……だろうな」
「はい」
小腸辺りをずるずると引っ張って内容物を引きずり出しているカルーという女を、二人してしばらく眺めていて、「働け！」とリグムに叱られた。

ガンドラ平原に入り、大炎壁が地平の向こうで薄っすらと空を明るくしていた。普通には気づきにくいが、逆の地平線と比べれば直ぐにわかる。
「勿体ねーなぁ」と俺は呟いた。あそこで燃えている可燃性のガスとは、つまり天然ガスだ。しかもあれだけ派手に燃え続けているということは相当量が噴出し続けているのだろう。
「何がだ？」
と、リグム。
この世界の人間にはガスの利用価値がいまいち理解できないらしい。というか俺の元いた世界で使われていたガス技術はほとんど魔法技術にとって代わられている。だから必要ないといえば必要ないのだが。

直した。

なかったガスの最も有効な利用法だったのかもしれない。そう思い

あの壁が戦争を終わらせたのなら、それは俺のいた世界でもでき

と、俺は答えた。

「なんでもない」

「アイバ」

「ああ」

ここはまだ王都から百数十キロくらいのはずだ。報告にあった地点は二百五十キロ。なのに地平線が黒く盛り上がってるあれは……。

「喜べリグム。どうやら俺一人がどんなに急いでも無駄だったらしい」

「君はその無用な軽口をやめればもう少し長生きできると思うよ」

あちらから王都に向けて移動してきたのだ。百数十キロを自前の足で、ゆっくりと。恐らくはもう周辺に「餌」が無くなったから――。

リグムが片手を上げ、一団を制する。ほどほどに気を抜いていた兵共に緊張に似たものが走る。

「総員、第一種戦闘配備」

この部隊は精鋭五十名をただ掻き集めただけだ。だから普段の所属も何もかも違う。それでも全員が最初に取った行動は同じだった。それは馬を乗り捨てること。現代魔法戦においては馬程度の機動力は邪魔なのだ。高い魔法能力を持てば持つほどに。

「まったく頼もしいね」

そして静かにそれが下されるのを待つ。

リグムが小さく息を吸い込んだのが俺にはわかった。

「突撃！」

号令と共に最初に駆け出したのは、赤毛の女だった。呼吸によって人間が取り込む酸素量は空気中の三％程度だ。鉄属性『血迩餌液（ケゲルウキ）』

によって血中のヘモグロビンを増大させ酸素供給量を通常の数倍にまで膨れ上がらせて、グルコースから筋肉のエネルギー源たるアデノシン三リン酸を生産する反応を促進させたロットウェルが一陣の旋風となって魔物の群れに突っ込んでいく。

　それに一刹那だけ遅れて火属性『爆迦風裂(バーグルツ)』によって背中側からブースターのように爆風を噴射して加速する体格のいい金髪の男が追う。最大速度や加速ではこちらのほうが上だが、発動の早さで『血迹餌液』が勝ったようだ。先陣を切ったのはロットウェルだった。

　鉄属性の鈍色の発動光がロットウェルの手から長大に伸びる。『巨乾坤人(キゴジルト)』が発動。六メートル超の巨大な剣がロットウェルの両手にしっかりと握られて出現。『鐙轍済革(アスゼルワ)』によって鋼の鎧で外骨格を形成し、地面に根を張り重量の一部を引き受けさせる。

「おおおああああああああ」

　人間というよりは獣の吼え声に似た咆哮を上げて、六メートル超の大剣が魔物の群れをなぎ払う。

……あの女どんな筋力してんだ。

　補助術式は働いてるとはいえ、あの巨大さだ。おそらく重量は数トンあるはずだ。

　なぎ払われた範囲の外から魔物の群れが獲物であるロットウェルを目掛けて殺到する。無数の発動光が浮かび、炎、水、風、あらゆる魔術が降り注ぐ。が、ロットウェルに到達する前に別の物にぶち当たった。

　褐色の肌をした女――カルーと言ったか？――が桃色の肉の塊を地面の死体共から隆起させる。生物系『死罵餓肉(シガガリク)』が死体の肉に過剰な量の水と脂肪を与えて膨張させたのだ。肉の壁は切り刻まれ燃やされて穿たれながらも膨張を続ける。生きた魔物の肉を取り込み、消化酵素で表面を溶かし、細胞同士を癒着させ身動きを取れなくする。そこへ死肉の壁を切り裂きながら更に大剣が閃く。

　しかし操物士の技は見た目がぐろすぎるな……。

『爆迦風裂』によって上空まで跳び、肉の壁の上に立った金髪の

男が長大な術式を解凍する。油の入った二本の瓶が投げられ、それに火がつく。小さかった炎が地面にワンバウンドした瞬間に圧倒的に燃え広がった。燃焼領域の酸素濃度を調節して爆発的に燃え広がる『火儘獄沁炎』の術式を二重展開。爆風が広範囲を砕いていく。

宙空から襲い来る鳥類に似た魔物が炎撃士の下に滑空してくる。油の入った瓶をそちらに投げるが、急上昇しそれを回避。炎撃士のあとを追ってきた風向士が『旋捲風（セルグウ）』によって追い風を吹かせ、風を切って揚力を生む翼の機能を失わせる。油が爆ぜ『熱於餌風（ネルローゼ）』の熱風が皮膚を焼き、気道を焼き、肺を焼く。

「なんか俺の出る幕なさそうな感じかねぇ」

ちょっと距離を取ってみていたが、数が多いだけで大して強いやつもいなさそうだ。この調子なら殲滅までそう時間は掛からないだろう。

「アイバ」

リグムが働け、と目で命令してくる。

「……了解」

手のひらを空に翳す。気流を集める。兵士共が頑張ってる間に練り続けていた『気訃璃嶺流（キゼルフェセウ）』を準備段階まで起動。

「総員退避！」

リグムの声は全員が戦闘に集中していたにも関わらず正確に鼓膜を揺らした。ロットウェルが大剣を放棄、代わりに『鉄姿剰壁（テララゼキ）』の鉄の大壁を築いて魔物を食い止めながら後退。

俺は『気訃璃嶺流』を発動。樹木や大型の建造物ですら吹き飛ばすマイクロダウンバースト――下降気流――が効果領域のすべてを押しつぶしていく。自然発生したものならば力の逃げる余地が存在するが俺のコントロールは完璧だ。

「……ふう」

発動を終える。半径数キロくらいに体液を垂れ流しながら圧力によって地面と一体となった無数の屍だけが残った。

「わぁ」
ロットウェルが静かに感嘆を漏らす。
まあこんなもんだろ、と思いながら、俺は、新たに進撃してくる化け物共を見た。
「……一体何匹いるんだよ」

「アイバ、気づいてるか」
「ああ、あれだけ仲間を殺されたのにまったく躊躇なく進撃してくる。普通の魔物にはちょっとありえないことだな」
「それどころか、お前が潰した仲間を平然と踏みつけてくる。群れる魔物は仲間意識が強いことが多いが、それもない。なんだろうな……」
「なにか作戦に変更は？」
　ロットウェルが後ろから言う。
「ないな。いくら数が多くても僕たちが遅れを取る要素がない。疲労した者は下がれ。以上だ」
「了解」
　数人が言う。他の数人は術式を紡ぎ始めていた。
「わかった。じゃあ、最初は僕が仕掛けるよ。そのあとに続いてくれ」
「俺も前衛で参加するよ」
　リグムは自分の胸の前で両手を合わせた。『火儘獄沁炎』だが可燃性の魔力を作り出すことで油なしで発火させている。加えて酸素密度のコントロールも本来毒属性の魔術師であるリグムの得意とするところだ。
　ぐん、と前方の空間に引き摺られるような感覚があった。次に視界のすべてが紅色に染まる。金髪の炎撃士が起こしたのとは比べ物にならない大破壊。加えて『旋捲風』によって熱波を相手側に押しやる。複合属性を扱えるリグムでなければこの威力は出せないだろう。炎撃士の顔に絶望に似たものが浮かんで、すぐに消えた。

「散開」
俺は刃を抜く。『速離源力(ソロバリク)』を発動、空気を吸引し、後方に噴射して超加速する。同じく加速術式を使っているロットウェルを追い抜いて突進する。先頭の狼型の魔物が牙を剥いてきたので逆噴射で速度を緩め、更に真横に動く。首筋を半分切断する。次の猿人型の魔物が腕を振り上げて、隙だらけの胸部を晒していた。加速し、心臓を突き刺す。魔物の群れは数匹が取り囲むように動いてきた。「おっと、」一匹を『速離源力』のベクトルを変換し心臓部に噴射し吹き飛ばしながら猿人の腕を切り裂いて攻撃を阻止、一匹目を吹き飛ばした方向にステップし、真横から襲い掛かってきた大蛇型をかわす。ついでに首を断ち切る。血の匂いに釣られたのか、さらに群がってきたので『旋捲風』を縦に二重発動し、それらを旋風で地面に縫い付ける。
「アイバ様！」
俺は大きく跳躍。追いついてきたロットウェルが通常サイズの剣を投擲し、二匹の脳天を割る。更に六本の剣を空中に生成。射出し近づいてきた魔物を縦に串刺しにする。舞うように跳躍、両手の剣で次々に魔物を切り裂いていく。途中数度牙や爪が突き立つが、鋼の装甲の前に沈黙する。生半可な物理攻撃は無効化できるのが鋼鉄系の魔術の強みだ。後方に控えていた魔物から発動光が漂ってきたので『旋捲風』で潰す。
「やるねぇ」
「どもども」
ロットウェルには笑みを見せる程度の余裕があるらしい。まったく頼もしい限りだ。と、紫色の巨大な発動光が展開した。リグムの毒属性の上級魔術のようだ。
「全員、俺の周りに集まれ！」
リグムがそうしたように声の振動波に指向性を持たせて鼓膜にだけ届ける。周辺にいた兵が俺の周りに集中、付随して魔物共が集まってくるが、ロットウェルの『鉄脅槍(テガアリ)』による無数の鉄槍がそれら

を串刺しにする。それでもまだ足りない分は、
「跳んでください！」
『巨乾坤人』の巨剣が一閃。それでことが済んだ。
俺は『竜臥断鱗巻（リダリゼグマ）』の低気圧を中心に周辺物質を調整、上昇気流を伴う螺旋形の風の膜を張る……、よりも少し前に『王腐瑠覇水（オルナバズイ）』が、高い対腐食性を持つ金やプラチナでさえ溶かす王水の奔流を撒き散らした。
「っ……、マズッ」
術式の構築を急ぐ。毒の津波が目の前に迫っている。間に合わない……？！
「くそっ」
俺の脇から油の入った瓶が投擲された。『火儘獄沁炎』の爆炎と爆風が毒を弾く。一瞬の合間のあと俺の竜巻が俺達だけを毒から守った。
「悪い」
「俺は俺の身を守っただけだ」
金髪の炎撃士は無愛想に言う。
「……わお」
竜巻から飛び出ていたロットウェルの巨剣の切っ先がキレイに消失して蒸気を上げていた。周辺の地面からはまだ濃い霧があがっている。生物系の魔術を使うカルーが王水の分解を進めている。
「あの野郎……。俺達まで殺す気かよ」
「どういうつもりだ？」
風を噴射し、跳躍。リグムの隣に降り立つ。
「済まない。コントロールを誤った」
コントロールを誤った？　王国最強と言われるこいつが？
「……」
「るおおおおおっ！」
ロットウェルの咆哮が耳を切り裂く。

「ちっ……」
　リグムの胸倉を引っつかんでやりたかったが、いまはそんな場合ではなかった。
　再度風を噴射し飛行、戦いの中心に戻る。
　ロットウェルが剣を振り回している、その後ろで褐色の肌の女が獣の牙を振り上げていた。
「ロットウェル！」
「えっ？」
　噴射を最大まで引き上げ加速、するさいに後ろになにかが抜けた。おそらく誰かが俺を攻撃した。
　俺は時速約３００キロでロットウェルの手を掴んで引き摺る。こいつ、重てぇ……！　鋼で武装してるから当たり前なんだが。毒の塗られた獣の牙が寸前までロットウェルのいた場所に突き出される。
「カルー？！」
　下に向けて噴射の角度を調整し、上空に離脱する。
「カルー、何を……」金髪の炎撃士が女を止めようとする、フリをして油の入った瓶を上空に投げた。即座に『旋捲風』を叩きつけて瓶を打ち落とす。逆向きの『旋捲風』が俺のそれと一瞬拮抗するが、俺のほうが魔力量が多く、下向きと上向きでは重力の助けのある下向きのほうが強力なため叩き落すことに成功する。
「ど、どうなってるんです？」
「知るか！」
「あたしを抱くなんてどういう心境の変化なんですか！」
「落とすぞ」
「ごめんなさい。やめてください！」
　加速して攻撃を回避しながら動く。重過ぎてかなり辛い。
「途中までは普通だったよな。……いきなり、いや、病状の進行？　俺とこいつだけが平気なのは、昨日の晩に戦わなかったからか？　ちっ、多分リグムのやつも掛かってるな」
「病気？」

「錯乱してるわけじゃない……。病でもないな。あれはあきらかに俺とお前を狙ってる。つまり誰かの意思がある。あれは、おそらく魔法だ」
「あんな魔法聞いたことも見たこともないですよ」
「俺もないな。だが実際あるんだから、認めないわけにはいかないだろ」
「ですけど……」
「ちなみに俺には選択肢が二つある。ここでお前を見捨てて一人で王都まで帰還するか、わざわざお前を助けてやるか、だ」
「是非後者でお願いします！」
「そのためには、元仲間を皆殺しにしないといけなさそうだな」
さっきからこいつを抱えてるせいで速度が上がらない。そして加速系が使えるやつらはリグムを含めずっと俺の下をついてきている。
「あたし的には自分の命が一番かわいいので全然ＯＫで」
「よく言った。降ろすぞ、三十秒魔物共を誘き寄せろ」
「ラジャ！」
降ろす、っていうか、落とした。魔物の群れの丁度真ん中あたりに。動揺一つせず上手に着地し、刃を生んで魔物共の蹂躙を開始する。
俺はリグム達の前に降りる。
「やめろ」
形式上、説得を試みてみたが、返事すら返ってこなかった。無数の術式が一斉に俺に向く。まともに受けたら骨も残らない。
「……まともに受けなきゃいいんだよな」
発動されている発動光が入り混じりすぎて訳がわからないことになっているが、軌道はだいたい把握できる。そのほとんどが上級魔術だ。つまり発動は早くない。
『速離源力』の最大加速、俺に出せる最速で間合いを詰める。慌てて高速発動に切り替えるが、遅い。後方数ミリ先を爆炎が抜けていく。俺は最初に間合いのうちにいた一人の首を切断。突き出された

獣の骨に似た武器を、体を捻ってかわし、両腕から胸部にかけてを斬る。味方が密集しているので相手は大規模術式を使えず、かつ小規模術式や体術では『速離源力』を超えることはできない──、と思っていた俺はリグムが『王腐瑠覇水』を味方を巻き込むように使ったことをギリギリ思い出して、最大加速で離脱。案の定、風向士の『気訃璃嶺流』が味方を砕いた。余波こそ受けたもののなんとか俺自身は無傷で済む。十数人が自分の術で潰れても風向士は顔色一つ変えない。

「はぁ、恐いなぁ」

接近戦は博打だと思い知る。うん、一発で片をつけよう……。

空中でずっと紡ぎ続けていた術式を解凍。風向系魔術最高位、魔王にトドメを差した魔法を起動。

「……悪いな、俺のために死んでくれ」

一部隊すべてがその空間に存在した物質と同時に消失した。効果範囲空間に全方位からの圧力を掛け続けて存在しうる最小の点になるまで押し潰す。ビッグ・クランチと呼ばれる宇宙の終焉の形を体現する、あらゆる防御の通じない、無二の攻撃魔法。一介の風向士に過ぎない俺が勇者と呼ばれる最大の理由だ。

この魔法に名前はない。俺しか使えないし、俺が名づけるのも面倒だからだ。

ただ、発動光が膨大で起動速度が遅い。つまり読まれやすいのがこの術の欠点だ。効果範囲がそこそこ広いので並みの相手ならば読まれてもまったく構わないが。

「やっぱお前はこんな手品じゃ死なないよなぁ。リグム」

　魔術師の強さは概ね血で決まる。時々なんの血筋もないものから突発的な天才が生まれたりもするが、そんなものはやはり例外に過ぎない。そしてナイトロールの血は多くの魔術師を輩出し続けてきた最上の血だ。今回の部隊の中にもナイトロールの血が混ざっているものは、少ないないだろう。王国で活躍している八割の魔術師がなんらかの形でナイトロールと関わりを持っていると言われている。
　その中でも一柱と呼ばれる真に強力な魔術師の血だけを取り込んだ一族に生まれたのが、リグム＝フェン＝ナイトロールだ。

　疲労感がある。桁外れの魔力量を持つ俺だが、「宇宙の終わりを体現する魔法」なんか使って疲れないはずがない。
　ロットウェルのこともあるし、長期戦は不利、と判断して『速離源力』を展開。近接格闘に持ち込んで一気に片をつける――！　フル加速で突っ込んだ俺との間に『青喪酸（アズン）』によるシアン化水素の霧が立ち込める。これはいわゆる青酸カリが胃酸と反応した際に生じる猛毒の物質で毒属性の基本術となっている。洗脳の類なのか、知性のほうはおざなりになっているらしいと俺は思う。風属性の俺には気体系の毒魔術は基本的に通用しない。『旋捲風』で吹き飛ばす。
「っ……」
　俺は噴射の角度をほとんど真上に変えた。慣性で体が軋む。『旋捲風』による突風を利用した高気圧がリグムの手の中で成長を続けていたからだ。溜め込んだ風がついに破裂。『青喪酸』まで内部に吸収したそれが爆撃に似た空気の炸薬となった全身を叩く。『速離源力』が破壊されるのがわかった。毒の霧の中に落下する。受身はとったが、まずい。呼吸を封じられた。薄い空気の膜を纏いシアン

化水素の体内への侵入を阻むが、肺に蓄積された空気の量には限界があり、流石の俺も呼気の選別まではできない。『旋捲風』を発動しようとするが、リグムの毒の魔力が混じった大気は、俺にはひどく扱い辛い。無色の気体であるシアン化水素からはリグムが赤い発動光を構えているのがしっかりと視認できた。『火儘獄沁炎』！

爆風と高熱を同時に起こすあの魔術の前では生半可な防御魔法は意味を成さない。魔術戦ならほぼ詰みの状態だが、これは実戦だ。俺は右手に持つ剣を投げた。『火儘獄沁炎』を構築中だったため魔術を発動することができずに、別に身体的に優れているわけではないリグムは回避することもできなかった。右胸に深く突き刺さる。痛みで組成が途切れたらしく赤い発動光が歪みながら消え去る。俺は魔術の補助なしで疾走し、リグムに掴みかかる。拳を握り、新たに魔術を構築しようとするリグムの喉を叩いた。喉仏というのはれっきとした急所の一つでここを強く叩かれると呼吸困難に陥る。肺から空気を吐き出し噎せるリグムに、俺は、シアン化水素に塗れた空気をくれてやった。

……空間に充満していたリグムの魔力が薄れていく。俺は『旋捲風』を使い、自分の周囲の毒を吹き飛ばす。

親友の体が痙攣する。肺から血液に入ったシアン化水素が内臓の酸素伝達を阻止している。

俺はしばらく親友が死んでいくのを見ていた。放っておいたら複合系魔術師であるこいつは酸素と亜硝酸アミルの吸入、あるいは亜硝酸ナトリウムによる解毒をしかねない。俺は親友の胸部に刺さった剣を、真横に払った。右胸に刺さっていた剣は左胸を抜けて心臓を切り裂いた。痙攣が止む。

……俺は『速離源力』を使う。ロットウェルを回収しなければならない。

魔物が一点に群がっているのがわかった。血の匂いに釣られているのだとわかる。剣が握られた腕が、魔物の間から見えた。

「食われたのか……」

任務失敗、として報告するしかないだろう。俺の疲労もかなり厳しい。

一人ならば一、二時間程度で王都まで戻れるはずだ。

俺は魔物の群れに背を向けた。

王都に戻ると街は妙に静まり返っていた。魔物の血を浴びている俺の格好を見ても誰も何もリアクションを起こさない。まるで俺が見えていないようだった。
王城に入る。警備兵も同じだ。
リグムが死んだから報告を済ませようと思い、とりあえず玉座の間に向かう。
「あ、お帰り。アイバ」
カイセルの無邪気な声が俺を迎えた。
カイセルは玉座に座っている。その周囲には総統だとか王姫とか王とか大臣だとかが、跪いていた。
「ああ、やっぱりかよ……」
リグムや、魔物達は何かの魔法によって操られていた。だがあんな魔法は本来存在しない。存在しないような魔法を作り出せる魔術師は限られている。
「なんでこんなことしたんだ」
「ええと、アイバはどこまでわかってるの？」
「お前が洗脳みたいな類の魔法を使えて、魔物の群れとリグム達を操ってたこと。それからいま王都の人間すべてがお前の支配下にあることくらいだ」
「洗脳、とはちょっと違うかな。僕の呼び出した召喚獣は寄生するんだ」
「寄生？」
「そう。人間の脳にね。元々アリの脳に寄生する菌があることを知ってさ、召喚して培養して研究して、強化してみたんだ。んで、魔物の脳に寄生させることはできたし、魔力のラインも通せて僕の命令は聞くみたいだったから、とりあえず魔物の群れに放してそこを

菌の巣窟にした。で、人間の脳にも住ませられそうだったから、使ってみた。自信作だよ。乗っ取るまでちょっと時間がかかるので難点だけど。あ、アイバに使わなかったのは、アイバのことが好きだったから。培養した魔物に人間を襲わせたのは、君をここから出すためだ。アイバはさ、ここにいたら僕を止めただろ」
「……なんでこんなことをした」
「うるさかったんだ」
「うるさい？」
「うん。小さいときから暗殺とかで危険だからって、部屋に閉じ込められて育ってさ、魔王と戦えとか、財政困難だから働けとか、いきなり言われても迷惑なんだよ。僕にはそんなことできないんだ。で、一つ思いついた」
「……」
「僕が変われないならみんなが変わればいいじゃないか」
「そんなことのために、か」
俺は剣を握り締めた。
「ああ、一応言っておくけど、僕を殺してもこの魔術は解けないよ」
「わかってる」
「どうせどうしようもないんだからさ、一緒に遊ぼうよ、アイバ。人間で遊ぶのって、結構楽しぃよ。こんな風にさ」
王姫が突然服を脱ぎ始めた。兵士が性器を露出させる。全裸になった王姫が跪いて口を開く。兵士が放尿する。王姫は口一杯に受け止めながら心底嬉しそうな顔をした。快楽の神経までカイセルの召喚獣に蝕まれているらしい。見ていられずに俺は二人の首を落とした。
「気に食わない？」
「……ああ」
「そっか。じゃあ仕方ないね。まったくリグムも面倒な人格を植えつけたなぁ」
「人格を植えつけた？」

「うん。君の本名さぁ、ガーレ＝アークって言うんだよ」
「は？　俺が？」
「うん、君ね。僕が召喚したんじゃないんだ。アストナ＝フェン＝ナイトロールとの決闘のあと、あっちの皇帝以上に君は民衆に人気が出ちゃってさ。帝国は奇襲作戦と命を打って、君を絶対に達成不可能な任務に割り当てたんだ。汚名を着ずに君を殺すためにね。
ナイトロール一柱の本家を襲撃したんだよね。
君は強かったけど、バカだった。アストナ一人なら打ち倒すことができた君だけど、リグムを中心とした集団戦闘を前に敗れた。君は捕縛されてリグムの他にカルートリア＝セルル＝ナイトロールとか、生態系の魔術師を中心に、偽の記憶を植え付けられた。
異世界から召喚されたなんて荒唐無稽な話を使ったのは、君の容姿が赤や金の髪の多い王国の人間としては無理があって、他国の人間としてなら帝国のことは避けて通れない問題だったから。記憶に接続できないようにしたけど、頻繁に琴線に触れるのは避けたかったんだって。
ちなみに君の記憶のベースになったのは小説だよ。もし魔法がなくて、代わりに科学っていう技術があったら世界はどうなっていたか。っていうお話だった。魔法崇拝気味だったアストナが怒って焚書にしちゃったから、リグムが持っていた一冊以外はこの世にないらしい。読む？　あげるよ。僕は結構おもしろかった」
「……なんだよ、それ」
「君は帝国に戻ったらいいんじゃないかな。たった半年だ。まだ君を覚えてる人間はいっぱいいると思うよ」
「俺を殺さないのか」
「まさか。なんで僕が君を殺すのさ。僕はね、いまとっても嬉しいんだ」
「……」
「これからは誰の声もうるさく感じずに済む。僕は誰にも聞こえない悲鳴を挙げずに済むんだ。こんなに安らかな気持ちになったのは

始めてだよ」
カイセルはたった一人だけの玉座で、本当に心の底から嬉しそうに笑った。
「さよなら、アイバ。できれば元気でいてね」
「ああ、さよなら。カイセル」
血まみれの刃を納めて俺は玉座を出た。
俺は無敵の勇者だったはずだ。
だがどんなに鋭い魔剣でも振るい手がいなければ何も斬ることはできない。何をしても無駄だった。誰も帰ってこないし、ここでカイセルを斬ったところで何も変わらない。俺の無敵の強さは既に意味を失っていた。
「はは……」
どこまでも俺は虚しく滑稽な道化にすぎなかったらしい。
「くだらねぇ」
俺は王都を出て、どこか別の場所を目指して歩き始めた。
ここじゃなければ、どこでもよかった。

猫と勇者は死神と奈落に共鳴するとかしないとか　1

——最も恐ろしい復讐の名を、愛という。

シャルトルーゼのある女

「……ふむ」

都を出てみたが、どこへ行こうか迷う。

王国内にはいるべきではないだろう。カイセルの寄生魔術による支配が明らかになれば、どう転ぶかわからない。内乱になるかもしれない。それに巻き込まれるのはぶっちゃけごめんだった。魔物との戦いで死ぬ人間はまだ救いようがあるが、人間同士のくだらない支配権争いに参加する気はない。ただでさえ俺は『勇者』なのだ。俺の名前があることで正義があると勘違いして尻馬に乗っかるやつがいたら、面倒を見切れない。そもそも俺はカイセルと争いたくない。力量的な意味で。

というわけで国内に留まるのはない。

候補として、北北東に位置する帝国に帰るのは真っ先に除外する。俺が帝国の人間のことを知らないのに、帝国の人間が俺のことを知ってるとか気持ち悪い。行きたくない。

それから真西に向かえばアルバース公国があるが、魔王関連のせいで凍結こそしたが冷戦中で、国境を越えることはできないはずだ。

それにアルバース公国にはいい思い出がない。俺が召喚……、じゃなくて記憶を奪われてから一度アルバースを奪還する名目で大隊が出撃したことがあった。それが一人残らず謎の伝染病に掛かって救援を求めてきた。俺が護衛として治療団についていったのだが、どうもその伝染病が誰かの魔術らしかったのだ。魔術だと判断した根拠は二つ。

大隊の全員が病にかかったこと。

そして死者が一人もでなかったことだ。

もっと強力な病で皆殺しにできるが、どうする？　とそいつが忠告してきているような感じがした。結局そのときは全員が戦意を挫かれ帰還することになった。
「アルバースの平和主義な破滅」という名は、それからリグムに聞いた。相当に強力な病毒士らしく、アルバース公国の守りを一手に担っているんだとか。関わり合いになりたくはない魔術師だ。
となると残りは、北西のパピュス自治区か、南のシャルトルーゼか。パピュス自治区……、となるとヨゼフのやつが突っかかってくるんだろうなぁ。「王都があんな状態になったのって、お前のせいでもあるよねー」とか嫌な笑顔で言ってくるのが容易に想像がついた。
よしっ、決めた。南に行こう。

空気にカイセルの呼んだ「菌」が混ざっているような気がして、一秒でも早くここから離れたかった。
俺は『速離源力』を使う。空気を吸引、圧縮し噴射して加速する。最高時速は三百キロほどだが障害物が鬱陶しいから重力と釣りあう程度に風を噴射し飛行しているから速度が少し下がっている。それでもまあ五時間も飛んでたら国境あたりにつくだろうと、俺は悠々と空の旅に出かけた。

というわけで五時間後。一応、国境に警備兵がいたので、無視するのも悪いかと思い手前で高度を下げ、スピードを落とした。徒歩で近づく。
「冒険者だ。シャルトルーゼに入る許可を貰いたい」
俺が言うと警備兵は困ったような、泣きそうな、よくわからない表情を見せた。……察するにビビってるのか？　『速離源力』の使い手でも実際に三百キロ近い速度で飛翔できるやつは少ない。空気抵抗というのはその辺りからいっきにひどくなり、下手なやつがその速度で飛べば後方に首がぽろりと落ちることになる。また呼吸の

問題もある。それらを全部魔術で賄えるやつが、三百キロで飛翔できるわけだ。つまり俺は魔術師としての技量を晒してしまったらしい。
「あの、別にとって喰いやしないんだからさ……」
「ひぃっ」
リアルに人が「ひぃっ」っていうの始めて聞いた。なんか結構ショックだぞ。
「なんの騒ぎだ？」
警備兵さんの後ろからキャルト族の女が出てきた。なにやら騎士らしい服装をしている。橙色の髪で目つきはきつい。体つきは細いが無駄がない肉のつきかたをしていた。ふむ、悪くいえば貧乳。
「シャ、シャルル様。あ、あの、こいつ……」
「シャルル？」
どこかで聞いたことのある名前だった。
「……遠路遥々ご苦労だにゃ。ガーレ＝アーク。『紅蓮の長槍（フレイムランス）』の次は私を殺しにきたのか？」
ちなみにキャルト族は全身を薄い体毛に覆われて、耳が丸くてふさふさ。更に女がことごとく美人なのが特徴。
ダークブルーの瞳で俺を睨んでいる。恐ろしく暗く映る目だ。……しかしナをうまく発音できていないのがその緊張感を凄まじく台無しにしている。
「いや、ほんとに観光同然で来ただけだ」
「信用できないにゃ。にゃみ（並）の冒険者にゃらともかく、ソードフィールドをただで通すほど私はあまくにゃい」
何、この萌え生物。とりあえず記憶している中でキャルト族に会うのは初めてだが、超かわいいんだが。飼いたい。持って帰りたい。撫で撫でわしゃわしゃしたい。もふもふしたい。
「ええと、つまり問答無用で帰れ、っと？」
「どうしてもというにゃら、私を殺してからいくんだにゃ」
……まあ仕方ないか。俺にはどうしてもこの萌え生物を手にかけ

ることはできそうにない。こいつを斬るとか、俺には絶対無理だ。
「そっか。悪かったな。じゃあ帰るよ」
「え、あ、ああ。お気をつけて」
拍子抜けしたように言う。
さて、シャルトルーゼがダメならどこへ行こうか。
やっぱパピュス自治区か。ヨゼフに会いたくねーなぁ……、とか思ってると、どこかの兵士が「敵襲！」と叫んだ。俺は不意にそちらのほうを見た。黒い影の群れ。地鳴りのような足音の群れが迫ってくる。魔物の群れだ。カイセルが操っていたのと似ているが、数はあれに比べたら段違いに少ない。
「バッドタイミング……」
俺は呟く。
「ちいっ」
舌打ちしながら、シャルルと呼ばれたキャルト族は俺を跳び越した。強化術式が発動した気配は一切なかった。
キャルト族の特徴は獣の遺伝子が混じっていることによる、人間以上の脚力だ。その分、手は若干退化しているらしいが。
関所から兵が出て要所を固めているが、馬に乗っているあたり、頼りない。上等な魔術師なら真っ先に馬を乗り捨てるはずだ。
「……手伝うかね」
俺は剣を抜いた。

シャルルと呼ばれたキャルト族の女は、ぶっちゃけていえばリグム級の腕だった。

　シャルルの周囲の大気がじりじりと爆ぜる。宙空に向けて大経口の銃のグリップ部分にブレードを取り付けたような、変わった武器を掲げると、その銃身に真っ直ぐに、晴天から稲妻が落ちた。

（刻鳴士！）

　俺は内心で驚愕する。

　カイセルのような変則系でもない限り、ナイトロールの上級魔術師というのはだいたいの魔術を使える。

　炎、水、土、風はもちろん、鉄、毒、生の属性なんかもリグムのやつは扱って見せた。だがそんな万能の超魔術師にも一つだけ絶対に使えないと断言した属性がある。

　それが「雷」だ。

　現代魔法戦において最強の名を欲しいままにしつつ、あまりにもコントロールが難しいため使い手の存在しない、幻の魔法属性なのだ、とリグムは言っていた。

　魔物の群れに銃を手に、突っ込んでいく。

　俺には『電凱波（デルデミ）』と『神嶽捉経（ジゼルセイ）』が発動しているのがわかった。前者は弱い電波を発信し、反響位置を把握することで視界の外の位置情報を得る術式で、後者は筋肉を動かしている電流をイオン交換でなく、直に電流そのものを接続することで、神経の伝達速度を秒速三十万キロメートルまで引き上げるものだ。俺も初見の魔術なのでかなり興味深いと思いつつ、『速離源力』と『旋捲風』を駆使しつつ、魔物を斬り、『気計璃嶺流』を構築する。

　シャルルの持つ大経口の銃からは、鉛の弾は発射されなかった。代わりに魔力の塊が魔物を砕く。背後から襲い掛かってきた狼型にシャルルの足元から『電璽流（ディスレ）』の細い電が絡みつき、感電した狼型

が動きを止める。同時に遠距離で魔術を発動しようとしていた魔物共の術式を阻害する。その硬直した合間に、右手が翻り額に銃口が添えられる。引き金が引かれ、狼の頭がスイカに似た割れ方をした。側面から襲い掛かってきた他の魔物の腹に、いつのまにか抜いたもう一丁の銃のブレードが腹部を切り裂き、下半身と上半身に分離させる。軽やかに跳躍し、足元から忍び寄ってきた虫型をかわし、『麻針臣惨痺（マーゼガルヒ）』が紫電をばら撒いて、魔物共の足を止める。着地したシャルルが銃弾を乱射、屈強な魔物共は土くれのように易々と砕かれる。更に接近し、ブレードを振るいながら、引き金を引く。

なによりも先ず、あざやかだという印象を受ける戦い方だった。

　前衛魔術師の代表格であるロットウェルのような錬装士は鋼の装甲による防御力を盾に刃を振るう。

　俺のような風向士は『速離源力』で速度任せの回避を中心にした高速戦を仕掛けながら、『旋捲風』を叩きつける。

　だが刻鳴士であるシャルルは至近距離戦で相手の手札を完封しながら、自分の攻撃だけを一方的に通す。電速の反射神経と周囲のすべてを把握する特異な魔術がそれを可能にしている。

（こいつと近距離戦は絶対やりたくないな……）

　おそらく俺は負ける。

　それはそれとして俺は『気計璃嶺流』を二重発動し、残りの魔物をすべて押し潰した。

「……協力感謝する」

「不服そうだな、おい」

　プイっとあからさまに不快そうに顔を背けた。だが、一応助けて貰ったことに負い目があるのか、向き直る。

「しかしガーレ＝アーク。貴様、随分と戦型が変わったにゃ。十六刀流のソードフィールドは使わにゃいのか？」

　もう一度言おう。キャルト族はナをうまく発音できない。

ってか、ん？　いまなんて言った？

「ソードフィールド？」
「貴様、本当にガーレ＝アークか？」
「一応そうらしいが、記憶を弄られてるらしくて、昔のことは覚えてないんだ。そもそも俺とお前は知り合いなのか？」
「……にゃるほどにゃ」
「シャルル様」
近づいてきた兵士の一人がなにやら固い表情で言う。
「わかってる」
シャルルは苦虫噛み潰したような表情で答える。
……なんだ？
「帝国の騎士である貴様にこんなことを頼むのはシャルトルーゼの恥だとは理解しているが、そんなことを気にかけている場合ではにゃいからにゃ……。『風の騎士』ガーレ＝アーク。シャルトルーゼを脅かしている魔王の討伐に協力して欲しい」
魔王？
「魔王って、ジギギギア＝ギギガ＝ガガギゾ以外のか」
ジギギギアとは、俺がリグムや数十人の魔術師団と共に戦った魔王の名だ。
シャルルは頷く。
「その魔王はアゼル＝アグア＝アアグオンとにゃ（名）乗っている」
魔王って何匹もいるんだな。いや、当たり前か。悪魔の中で特に強力な力を持ち、悪魔共を統制している存在を魔王と呼ぶだけなのだから。
「もう少し詳しい話を聞かせて貰えるか」
「ああ、ついてきてくれ」
それと同時に別の考えを思い浮かべていた。
？
関所の中の会議室に通された。そこで一通りの説明を受けたのだが、にゃーにゃー言って微妙に読み辛いので回想の形にしてシャル

ルの言葉を説明すると、「西の鉄鉱石の取れる山にその魔王は住み着いていて、月に十人ほどの人間を近くの村落から浚っていく。魔王の操る属性は鉄。兵士や、冒険者の護衛などをつけたり、討伐隊を向かわせたりしたのだが、それらの戦闘者の九割が死亡している。シャルル自身が戦線に加わったことはない。というのも、シャルルほどに強力な魔術師は他に存在せず、リグム＝フェン＝ナイトロールのような魔術師を有する国と戦争になった場合、もし魔王にシャルルを殺されてしまえば抵抗することもできずにシャルトルーゼは滅ぼされてしまう。百人の兵士より一人の強力な魔術師のほうが価値が高いのだ。魔王の被害が月に『十数人程度』だということも後押ししている」そうだ。

「つまり、俺が戦線に加われば勝率は格段に上がり、お前も魔王討伐に参加できるってことか」

「ああ」

「俺にメリットは？」

「もちろんそれにゃりに恩赦は出す。前金として――」

「そんなものより欲しいものがあるんだが」

「にゃんだ？」

「ちょっと聴かれたくないものなんだ。兵士を下げて貰えないか」

「わかった」

「シャルル様……」

「いい。遅れは取らない」

シャルルが言い、渋々と兵士達が引き下がる。

出て行ったのを確認して、俺は言った。

「率直に言うと、報酬としてお前を抱かせろ」

「……女を抱きたいにゃらば、娼館にでもいけばいいだろう」

「別に女を抱きたいわけじゃない。俺はお前を抱きたいんだよ」

空気がバチバチと爆ぜ出す。雷属性の魔力が感情に揺られて、溢れ出したのだ。キレてる。シャルルと裏腹に俺はこの状況をかなり楽しんでいた。

「俺の協力なしだと、シャルトルーゼで最強のお前は魔王と戦うことすらできないんだよな」
「……」
いやー、我ながら下衆いなぁ。
「シャルトルーゼを取るか、我が身のかわいさを取るか、お前はどっちを選ぶ？」
シャルルが机を強く叩いた。
「貴様それでも騎士か？！」
「昔はな。いまはただの冒険者だし。勇者とは呼ばれてたけど」
「勇者？　ふざけ――」
「ふざけてるのはお前だろ？　これが勇者だよ。我欲で戦い、自分のためだけに敵を討つんだ。名誉欲だったり、復讐だったり。ともかく命を賭けるに足るものがなければ勇者を動かない」
「っ……」
シャルルは銃口を俺の額に向けた。俺は動かない。こいつが引き金を引けないことを知っているからだ。こいつには当然沸いて出た俺というチャンスを自分の手で壊すことはできない。万が一打ってきた場合にも備えてるしな。
「決裂だ」
「あ、っそ」
俺は席を立った。
シャルルの脇を通り抜ける時、ギリと音が鳴るほどに強く彼女は歯を噛んだ。

「……さて」
シャルトルーゼの観光でもするかね。街に入る。王国より南方で温かい地域だけあり、市に入ってみると果物類が目を引いた。橙色をした掌大の果物を一つ買う。ちなみに通貨は王国と共通なので問題ない。貿易に不便だから全世界で共通の物が作られたのだとか。
「いま食いたいんだが、抜いていいか」
腰に釣った剣を示すと、商人のおっさんは頷いた。
剣を抜き、皮を削いだ。歯を立ててみると口の中に果汁が広がる。酸味が強いが、甘味とのバランスがいい。美味い。
「気に入った。これ、あと五つほどくれ」
「あいよ」
気のいい返事をして、袋に詰めてくれる。
「にしてもにいちゃん。なかなかいい剣捌きだね。兵士かい？」
「いいや、単なる流れの冒険者だ」
「冒険者？　シャルトルーゼにはすっかり寄り付かなくなったと思ってたんだが、にいちゃんみたいな人もいるんだねぇ」
「寄り付かなくなった？」
「ああ、魔王の話は聞いたかい？」
「小耳に挟んだ程度だけどな」
「あの魔王はなぜか冒険者ばっかり襲うらしいんだ。まあ最初の数人の犠牲者は、村人だったたんだがな」
「ふうん」
冒険者ばかり襲う？　奇妙な話だった。悪魔は人間を食う。というのも、人間が他の生き物よりも高い魔力を持つからだ。魔術師でない人間でも、だ。そして冒険者というのは少なからず腕に自信を持っている。仕留めるのに手こずる獲物をわざわざ狙う意図がわか

らない。
「おおっ」
おっさんが急に歓声をあげた。振り返って後ろを見ると、シャルルが数人の兵を引き連れて歩いていた。シャルルは俺に気づきながら俺を見なかった。思い切り睨まれることを覚悟していただけに少し拍子抜けする。キャルト族の表情はわかり辛い。しかしダークブルーの瞳だけはひどく感情が読み取りやすい。目が、何か決意を示しているように見えた。嫌な予感があった。……俺は『聴爾覚』を使った。この術式は特定範囲の音波を探知する。シャルルの周囲の音を拾うように調整。
「シャルル＝ディバイト様、このシャルトルーゼで最強の魔術師だよ」
おっさんが言う。
「キャルト族なんだな」
「ああ、十年と少し前にセルト獣共和国からの脱走者をこの街で匿ったんだ。いまとなっては大っぴらに動けてるけど、昔はいろいろ大変だったそうだよ」
「ふうん」
俺は剣を振るい、橙色の果物の皮を剥いた。一口齧る。
「ところで、この街に宿屋ってあるか」
「ああ、例の魔王のせいで潰れかけだけど、ちゃんと残ってるよ」
おっさんは親切なことに地図を書いてくれた。
俺は部屋を取り、『聴爾覚』に集中した。

「一身上の都合により、軍をやめさせていただきます」
「何があったのだ。シャルル」
「私を拾い、育ててくれたことには感謝しています。ですが、人を守れにゃい力に、にゃん（何）の意味があるのでしょうか」
「考え直してくれ。お前がいなくては、シャルトルーゼは帝国に──

──」

「失礼します」

……ふむ、真剣な会話が「にゃ」のせいでいろいろ台無しだったな。

俺はジギギギア＝ギギガ＝ガガギゾのことを思い出そうとする。

正直、思い出したくなかった。俺とリグムがいたにも関わらず、その他の生き残りはわずかだった。生き残りの多くが四肢のどれかを失い、戦闘者としての寿命を断たれた。しかもその多くが、魔王に一太刀も浴びせることなく、「弾避け」として死んでいった。絶望の記憶。『王腐瑠覇水（オルナバズイ）』と『火儘獄沁炎（カーゴグウン）』の乱れ撃ちで逃げ場を消して俺の風向系最高位魔法でトドメを刺すまで実に四十八人の死者と十六人の重傷者を出した。

「刻鳴士」シャルルは世界でも指折りの戦闘者だろう。それでも俺とリグムが組めば易々と殺すことができる。俺が多重発動の『旋捲風』で機動力を封じながら中級魔術を連発し、その処理に集中させる。そこへリグムが『火儘獄沁炎』を叩き込めば、抵抗の余地はない。つまり、単独での戦闘能力はシャルルよりも魔王のほうが絶対的に上なのだ。

シャルルだけでは間違いなく魔王を殺すことはできない。

「見殺しにしてもいいが」

あの萌え口調を失うのは惜しいな、と俺は思った。

……まあ言い訳だ。

俺は自分の生きる意味を見失っているのだ。親友だと思っていたリグムは俺の監視と記憶封印の更新者でしかなく、使命だと思っていた王国のための戦いは、帝国の騎士だった俺にとっては敵国を助けることでしかなく、助けられたはずのロットウェルは魔物に食われて死んだ。そしてリグムや王国の魔術師共に復讐する機会は、カイセルによって奪われた。

なにもかもが俺の手から滑り落ちていった。

「後味が悪いよな」

俺は何かを掴みたかった。

勇者として、命を賭けるに値する何かを。

　ソードフィールド、という単語に、俺は何か引っ掛かるものを感じていた。それから十六刀流。その二つの名称から、推測し、ガーレ＝アークの戦系を組み立てる。
　ガンドラ平原の戦いで俺は二万人の兵士を殺したらしいが、そもそも、俺に二万人の兵士を殺せるか？　と問われたら、答えはノーだ。
　魔力的には問題ないかもしれないが、体力が持たない。ガーレ＝アークは少なくともいまの俺よりも強かったことになる。ジギギギアと戦ったときと違い、盾にできる人間はいない。一緒に戦うのがリグムとシャルルの差はあるが、おそらくは同等かそれ以上の苦戦を強いられるはずだ。俺は強くならなければならない。でなければ、ロットウェルのときのような無意味な犠牲を繰り返してしまう。
「ソードフィールドと十六本の剣……」
　思いつくことは一つあった。
　いまから試している時間はない。武器屋くらいシャルトルーゼにもあるはずだ。
　俺は有り金をはたいて十五本の剣を買った。直感的に細身の物を選んだ。腰と大腿、背中が剣の重みで一杯になったが、その重さはなぜか妙に懐かしいものだった。

「ちぃっ！」
　シャルルは舌打ちを一つした。『電凱波』の探知電波を鉄の破片を撒き散らすことで撹乱されている。刻鳴士の術は精密な制御を必

要とする。通電性の高い鉄属性との相性は最悪に近かった。

「痴れ者共めが」

銀髪銀眼の悪魔の構えた両手に、鈍色の発動光が出現、一瞬遅れて柄から順に長大な剣が組みあがっていく。『巨乾坤人』の術式は使い手の魔力量によって生成可能な量が違う。魔王たるアゼル＝アグア＝アアグオンの作り出した剣は、四十数メートルあった。『血迹餌液』他数種類の魔術によって筋力を補助し、重量を軽減し横薙ぎに一閃！　『神嶽捉経』で電速の反射神経を得ていたシャルルは回避できたが、シャルルと共に来ていた兵士はその莫大な質量をまともに受けた。シャルルを除けば誰も、生き残らなかった。

「その程度の技量で我に挑もうとは、片腹痛い」

　薙ぎ払われた剣が翻る。シャルルまで到達する寸前で、『電癩是灼熱（デーグリウツ）』の電熱が鉄を溶解させる。

「ほう」

　わずかな興味がアゼルの口元を綻ばせた。着地際を狙って『鉄脅槍』の無数の鉄槍が放たれるが、寸前で左に逃げたシャルルの影を追うのみ。

「フゥゥ……！」

　シャルルは殺気を昂ぶらせる。呼応するように二挺の銃が電荷を帯びて輝く。アゼルは『鉄姿剰壁』の鋼鉄の壁を構築する。しかし銃身から吐き出された圧縮魔力弾はそれを易々と粉砕した。乱射された銃弾が鉄の壁を粉々に砕くがその奥には、アゼルの姿はなかった。

「！」

　上空に飛んだアゼルが無数の剣と槍と戟と矢と斧と鉈と刀を生成する。シャルルはその中の一つに電撃を放つ。強烈な電荷を与えられた鉄は電磁石となり、周囲の刃物を吸着。

　アゼルは強力な魔力で引き剥がそうとする。それよりも早く銃口から放たれた圧縮魔力弾が無数の武器を破砕させる。『電凱波』が乱されているシャルルは気づけなかった。アルミニウムの粉塵が、

彼女の背後から迫っていたことに。降り注ぐ鉄の破片をバックステップでかわそうとして、それの中に突っ込んだ。
（しまった……！）
「遅い」
アルミニウム粉塵に火がついた。爆発が伝播し、急激に燃え広がる。辛うじて目を閉じて網膜が焼かれるのを阻止し、がむしゃらに逃げようとするが、『巨乾坤人』の四十メートル級の大剣はシャルルに逃げ場を与えてくれなかった。
ゴウ、と風が音を立てた。
――『旋捲風』が熱波を割る。シャルルが目を開く。アゼルの片手に剣が深く突き刺さり、巨剣を取り落とす。数メートル離れたところに十五本の剣を纏ったガーレ＝アークが立っていた。
「間に合ったか」
「貴、様……？！」
「やれやれ、今日は騒がしい日だな」
『鐙轍済革』の鋼の外骨格がアゼルの体を覆う。
「一応、言っておこう。人間、ここで退け。私は争いを好まん」
アゼルの美しい声が大気を震わせた。
「にゃらばにゃぜお前は人を襲う？！」
「必要だからだ」
「答えににゃっていにゃい」
「納得できないならば、こう考えるがいい。お前らは牛や豚を食うだろう。それと同じだ。人間は魔力の濃度が他よりも高い。お前たち風に言えば、美味いのだ、人は。お前たちもそうだろう？　より美味いものを求めて、人は草ではなく果実を、虫ではなく肉を狩ってきたはずだ」
「大人しく喰われてやる筋合いはにゃい」
「ならば争うほかないか。その選択の愚かさを知りながらも！」
剣の一つが超高速で飛来し、アゼルの足元に突き刺さった。
「おいおい、二人でいちゃいちゃしてねーで俺も混ぜてくれよ」

「痴れ者め」
「つーかさ、理由とかどうでもいいんだよ。邪魔だから死ね」
ガーレが片手を翳した。軽く指を振るうと『気計璃嶺流』によって下降気流の槌が振り下ろされる。が、『鐙輸済革』の装甲の上に圧し掛かるだけ。返し刃に『鉄脅槍』が放たれる。ガーレは『速離源力』で超跳躍、シャルルの側に着地。
「にゃぜ来た?!」
「うん、まあ細かいことは気にするな。ところで確認しときたいんだが、刻鳴士って前衛職でいいんだよな?」
「いいや、前衛もできるというだけで、本来は後衛職だ」
「へぇ、じゃあ一つサポート頼むわ」
「……わかった」

『巨乾坤人』が横薙ぎに振るわれる。命中の寸前で『気訃璃嶺流』が叩き落す。ガーレが疾風を纏って駆ける。シャルルが高位術式を紡ぎながら、銃を構える。『電凱波』の探知電波が辺り一帯を反響する。ガーレの風で電磁波を妨害していた金属片が吹き飛んだのだ。すべての位置情報を把握したシャルルがアゼルの側面に回り、圧縮魔力弾を一発放つ。ガーレの剣とかち合いかけていたアゼルの槍を弾く。シャルルから紫電が発生し絡み付こうとするが、『鉄脅槍』が阻害。首を狙ったガーレの剣は、アゼルがわずかに頭を下げたことで兜に当たり、互いに弾かれる。バキリと嫌な音がした。ガーレの手首が折れたのだ。アゼルは至近距離で『鉄脅槍』が鋼の槍を降らせ、『旋捲風』がそれを歪めるが、すべてを弾くことはできずに右肩と左大腿に突き立つ。

「ぐうっ……！」

それでもガーレは隙を見せず、左手に刃を持ち替えわずかに後退。鎧の関節部を狙って斬撃を放つが、逆に言えば関節部の僅かな隙間くらいしか狙う箇所が存在しないため易々と防御、回避される。

(解せんな……。残りの十四本は飾りか？)

アゼルが両手に剣を構築、シャルルの放つ圧縮魔力弾と紫電を捌きながらガーレとの間に火花を散らせる。シャルルの弾丸が三連射されたあと、閃光が走った。雷属性の高位攻撃魔術、『雷撒繭擦走鳴（カデルセセルイ）』が秒速三十万キロメートルで肉薄、寸前で構築された『鉄姿剰壁』を先に発射された弾丸が砕く。刻鳴士の名の由来たる、空気の爆ぜた轟音を上げて雷鳴が鋼の鎧に突き刺さる。

「外された……」

続けて発動した『鉄脅槍』が地面に雷電を逃がしていた。電流はわずかにだけアゼルを痺れさせただけ。物体の先端に収束する性質を持つ電撃系の魔術は、速度こそ電速だが、低位の物は威力が低く、

高位で攻撃力の高いものは発動が遅い。予測さえできれば充分に防御可能なのだ。しかしそれで充分だった。『竜臥断鱗巻（リダリゼグマ）』が二重発動。螺旋形の上昇気流を構築をして、ガーレとアゼルを閉じ込める。

「何の真似だ？」

「見ての通りだよ」

「我と一対一で戦うだと？　なめるのもいい加減にするのだな、人間」

「なめてるのは、そっちだろ？」

「いいだろう。死ね」

シャルルの攻撃を警戒しながらだった先ほどと違い、全魔力を攻撃に回すことができるアゼルが『巨乾坤人』を二重展開。二本の巨剣が風を割って迫る。ガーレは『速離源力』で跳躍して回避する。

「臆したか？！」

アゼルが追撃に剣を振り上げようとした瞬間に、その両手に、鋼の外骨格を貫いて二本の剣が突き立った。

「誰が臆したって？」

ガーレが二本の剣を抜く。剣は螺旋形の風に乗り、アゼルの周囲に渦を巻いて迫る。

ソードフィールド。

十四本の剣が風に乗って接近、アゼルは打ち落とそうと剣を振るうが竜巻が防御を妨害する。また風に乗った剣が嘲笑うような不規則な軌道を描く。アゼルの背後まで回った剣の柄に『速離源力』が発動、時速三百キロの超高速でアゼルを貫く。右肺を衝き抜け、膝をついたアゼルに更に剣が殺到。首を振って頭と心臓に当たることだけは防ぐが、暴風に回避を阻害され数本の剣が体中に突き刺さって、崩れる。『鉄姿剰壁』の鉄壁が四方に構築され、剣を防ぐが、無駄。竜巻は中心に低気圧を生じさせる。それと上空の気圧差を利用し『気計璃嶺流』がアゼルに圧し掛かる。四方を自ら壁で覆ったアゼルには逃げ場がなく、気圧に発動を補助された『気計璃嶺流』のマイクロダウンバーストはアゼルの纏った鋼の外骨格の耐久力を

超えていた。
下降気流が止む。吹き飛んだ竜巻を再構築、再び「剣の領域」が展開される。
「足？くな」
「まだだ……」
鈍色の発動光が爆発的に集約。
「ちぃっ」
残りの剣と暴風で、術式の組成を妨害しようとするが、痛みを覚悟の上で術式を構築するアゼルは止められない。
危険だと判断したガーレは『竜臥断鱗巻』を中断、『速離源力』を高速展開し、背後に跳ぶ。
「まだ終わらん！」
『狙窪除穿都撃（ソガルドレルキ）』が数十の大砲を作り出す。砲弾を発射するための黒い銃身と暗い砲門がガーレの視界を埋め尽くす。すべてが一斉に火を噴いた。風程度では軌道は歪まない鋼鉄の塊が『速離源力』の数倍の速度で迫る。
「ずうおおらあああああ！」
『速離源力』をガーレの限界値である四重展開、時速三百キロを超える速度で軌道から無理矢理逃れようとする。
竜巻の余波が吹き飛ぶ。ガーレの背後にあったものはすべてが消し飛んでいた。鋼の暴君が蹂躙したあとは圧倒的すぎた。
だが。
「ふうう……ううう……」
わずかに暴君の刃は届かなかった。限界を超えた加速がもたらした重力に耐え切れず、脳に酸素が回っていない。
「ぐ、おおおおお！」
全身に剣が突き立ったままアゼルが咆哮をあげて疾走。
ガーレは微動だにしなかった。ただ耳を塞いで目を閉じた。
代わりに閃光が一筋走り、アゼルの頭蓋から地面を抜けた。
『雷撒繭擦走鳴』のアンペア数を調整された二億ボルトの雷が、

空気を引き裂いて轟音を鳴らした。
脳髄が炭化して黒く焼け落ちたアゼルが水蒸気を上げながら膝をつき、天を見上げて絶命した。

「ふう。ジギギギアより弱くて助かった」
俺はその場で尻餅をついた。足元に水溜りがあることに気づく。
「貴様、よくその出血で動けるにゃ」
「へ？　って、うお？！」
これ全部俺の血かよ？！　とりあえず血管を圧迫してとみたが、止まらない。
「手を退けろ」
シャルルが言う。手にはブレード。その周りが歪んで見えた。刃を走る電熱の高温が陽炎を生み出しているのだ。
「あの、シャルルさん……？」
「満足な医療器具がにゃいのだ。こうして塞ぐ他あるまい」
「お、お手柔らかに、お願いします」
シャルルは俺の傷口に刃を当てた。電熱が俺の皮膚を焼く。傷は塞がったが、痛すぎて治らなくてもいいから死にたくなった。
「助かったよ。正直、私一人にゃらば負けて死んでいただろう」
「魔王にほぼ一対一の勝負挑もうなんて馬鹿げてるんだよ。お前クラスの魔術師が三人はいないとまともに戦えないと思え。無知は罪じゃないが、人を殺すぜ」
シャルルは悲しげな目をして、散らばった兵士のパーツを見渡した。
「肝に銘じる……」
「わかればいいけどな」
なんかこいつのことをつくづくいいやつなんだなぁと思った。
利益とか仕方なくとかじゃなくて、純粋に国と人のために魔王を

討とうと考えたのだ。召喚されたばかりの（実際には記憶を奪われたばかりの、だが）俺は戦わないと利用価値がなく、殺されないために仕方なく魔王と戦った。
俺はリグム＝フェン＝ナイトロールを思い出す。あいつはガーレ＝アークを利用した。ふとそれはカイセルが魔王を討てる力を持ちながら「何もしなかった」と思われないためなんじゃないだろうかと思ったのだ。魔王を倒した勇者を召喚したものとして、カイセルは、王国の英雄になりそれなりの名声を得ていた。リグムはあれで結構弟思いなやつだったのだ。
「……浮かない顔をしてるな」
整理をつけるにはまだ時間が掛かりそうだが、ともかくあいつはあいつで悪いやつじゃなかったと俺は思いたい。俺達は形だけの親友ではなかったはずだ。
「いや、大したことじゃにゃいんだが、アゼルはにゃんのために戦っていたのだろうと思ってにゃ」
「この先にいけば答えはあると思うぜ」
「にゃに？」
「多分だがな、俺一人で行くつもりだったが、行ってみるか？」
「ああ。だがその前に……」
「なんだ？」
「私と共に戦って死んだものたちの、墓を作らせてくれ。シャルトルーゼでは戦場で死んだものは戦場に還すのが決まりにゃのだ」
「手伝わないぜ」
「わかっている」

遅々として進まない墓作りを結局手伝ってから、俺達は山奥へ入っていった。シャルルが『電凱波』を使うと目当てのものは直ぐに見つかった。洞窟の中にそれはいた。シャルルが強く歯を噛んだ。
「そんなとこだろうと思ってたんだが、的中だったな」
小さい子供が二人と、二十台くらいの女が一人。子供の二人は半

魔だった。おそらくアゼルが父親だろう。俺は剣を抜いた。
「ガーレ、何をする気だ」
「た、助けて。わ、私、人間……」
女は子供を突き飛ばした。俺はその首を撥ねた。もう一人を袈裟切りにして、女の心臓を貫く。
「ガーレ＝アーク！　貴様ァ！」
キレて飛び掛ってくるシャルルを、血を流しすぎた俺はかわせない。ああ、殺されるかなとなんとなく思ったが、馬乗りになって銃口を突きつけてままシャルルは止まった。
「答えろ。にゃぜ殺した」
「じゃあどうするのが正しかったんだ？」
「にゃぜ殺した！」
だからその「にゃ」、緊張感が台無しなんだよ！
「生き延びれば子供二人は人を喰う。それだけだ。女は人間だから人を喰わないだろうって？　本来人を喰うアゼルが女を食わなかったのはなぜだと思う？　断言してやる。垂らしこんだからだよ。こいつが追い出されたのか、逃げ出したのか、迷い込んだのか知らないが、餌でしかない人間に悪魔共が欲情するはずがない。罪がないとは言わせないぜ。ああ、最初は村人だったのは、こいつの知り合いが殺されて恐くなったのかもな。けど知らない冒険者共なら死んでいいってのはなかなか人でなしだな」
「そんにゃ馬鹿にゃ話があるか！　子供二人だって、町で暮らせば——」
「なぁ、人間は人喰いで育った子供を許せるのか？」
「っ……」
「迫害に遭って惨めで孤独に死ぬのと、いま死ぬのとどっちがましか。とか訊いてやろうか？　自分以上の力を持つ異端の存在に人間がどんな目をするか、キャルト族のお前はよく知ってるだろ。どんな形でも生き延びるのが正しいなんて傲慢な正論、俺は聴きたくないな」

ああ、やっちまった。

シャルルはぽろぽろと泣き出した。

「正義が、わからない」

そう言って、俺の胸を力なく叩く。

「大衆が正しいと言うものだよ。個人の信じるものは、正義とは呼ばない。だからお前は、どうあろうとしても正義じゃない」

余計なことを言ってるのはわかっていた。

シャルルは俺の頬に大粒の涙を溢し続けた。

……ってか重いから退けよ。

シャルトルーゼに帰り、とりあえず報酬としてそれなりの額の金を受け取った。俺は宿屋に滞在して傷が癒えるのを待ち、シャルルは結局軍に戻ったようだ。一度も俺の元を訪ねてくることはなかった。シャルトルーゼは料理のうまいところだ。野菜類の味が濃い。そのためか味付け自体は全体的に薄味で品がいい。

だからと言って帝国といつ戦争始めるかわからないシャルトルーゼに定住する気はないが。

仮にも帝国の「風の騎士」だからな……。情が移ってシャルトルーゼの味方するのも、いろいろまずいだろうし。うん。

俺はまたどこかに流れることにする。

次は南東のライムラントのほうにでも行こうか。「本の国」と呼ばれる魔術研究の盛んな地だ。いろいろおもしろいものが見れるかもしれない。

宿で清算を済ませて、出て行く。

「んで、お前何しに来たわけ」

「貴様に会いにきたのだ」

とシャルルは言う。町を出て東に少し歩いて、人気がなくなったあたりで追いついてきたのだ。

うん、男だったら一生に一度に言われたいよね。「君に会いにきたの」って。貴様じゃなくて。

「えっと、その、言いたくはにゃいのだが、報酬はいいのか」

例の「抱かせろ」って言った件のことを言ってるのか？

「勝手に助けて払えってのは迫るのは、さすがにないだろ」

「そ、そうか」

なぜか俯いて少し頬を染める。
襲っていいなら襲うけどな。まあ感電させられて圧縮魔力弾で頭蓋骨をカチ割られるのがオチだろうが。
「どこへ行くんだ？」
「ライムラント。ここと同じように観光目的だ」
「ライムラントか。……シャルトルーゼに留まる気はないのか？」
「なんでそんなこと訊くんだ？」
「ええと、あの、私、軍をやめようと思うんだ」
「へえ。なんでまた？」
「戦うことに疑問を覚えてしまった。だから、引退して花屋でもやろうと思ってるんだ。幸い金は唸るほどあるからにゃ」
「花屋か」
「ふんぎりがついたのはお前のお陰だ。ありがとう」
「どういたしまして」
それきり会話が途絶えた。
「じゃあ、行くわ」
シャルルに背を向ける。と、後ろで何かが動いた。横目に見ると銃だった。
「殺すのか？」
「目を閉じて四肢の力を抜け。そのほうが楽に死ねるぞ」
俺は言うとおりにした。接近戦ではどうせこいつには敵わないのだ。逆らうだけ無駄だ。
……頬に何か温かいものが触れた。目を開けると、真横にシャルルの顔があった。自分の頬に触れると、ほんのうっすらと唾液で濡れている。
「め、目を閉じていろと言っただろう？！」
わかりやすく動揺しながらシャルルは言う。
「えっと、……何？」
「た、助けてもらっておいて礼をもしにゃいのも、あれだし、その……、ああもう。お前にゃんてさっさとどこかへ行ってしまえ！」

プイッと背を向けて、二、三度こちらを伺ったあとシャルルはそのまま逃げていった。

「……ううむ、逃がした魚はでかいかもしれない」

次の場所を目指して俺は歩き出した。

シャルルが死んだという噂を聞いたのは、それから数日もしないうちだった。なんでも反逆罪で処刑されたらしい。花屋をやると言っていたあいつが反逆なんて起こすはずがないから、きっとあいつの力を恐れた領主が適当な罪状をでっち上げたのだろう。俺はあいつがそれに抵抗せずに応じた場面が、鮮明に浮かんだ。どこか諦めたような顔で人の罪を認めているあいつが。

「これが正義か」

ひどく悲しい声が耳元で聞こえた気がした。

それはそれとして「ふんぎりがついたのはお前のお陰だ」とあいつは言ったから、間接的にシャルルを殺したのは俺なのかなぁとか考えかけて、やめたくなったから思考をやめた。

「……処女だったのかな、あいつ」

なんとなく呟いて、俺は旅を続ける。

そして超越者達は魔剣を振るう　1

──戦いの始まりを告げる鐘が打ち鳴らされた。終わりを告げる鐘を打つものがいないことは私は知っている。

クセルゼスのある預言者

その王立図書館は、ライムラントの小さな国土面積の六十パーセントを占めている。

十五階建てで居住スペースまで設けられていて、ライムラントが本の国と呼ばれる由縁はそのあたりにあるんだそうだ。納められている蔵書には、高い物では一冊数億の価値があるとか言われていて、それだけでも侵略戦争が起こりそうな物だった。が、シャルトルーゼと違い帝国はライムラントには一切手を出していない。大陸最大の軍事力と資金力を持つチェインジュディス王国とも外交が割れれば強硬姿勢を辞さず、「常刃の国」と呼ばれた東方のヒノモトに数十万の被害を出しながらついに陥落させたクセルゼス帝国が、ライムラントを侵略できないのは一重に帝国の成り立ちに影響している。

クセルゼスは王国や、南西の海岸沿いに位置するガルドメイス獣共和国に比べれば、魔術的に後進国だった。元々東方にはそういう国は多いのだが、剣や槍での闘争技術が発展し魔法技術は生活基盤の一部にしかなっていなかった。そこへやってきたのがライムラントの一人の魔術師だった。彼が魔法技術を伝え、クセルゼスは体術や剣術と魔法を組み合わせた独自の戦闘技術を確立し、まだ剣や槍のみの闘争技術を用いていた周辺国を瞬く間に制圧した。経済や貿易の理由から長い時間をかけて多くの国家が結びつき生まれた王国と違って、歴史上他に類を見ないアホみたいな速度で領地を広げてクセルゼスは王国や獣共和国と等しい位置を手に入れたわけだ。

で、その魔術師はまだ存命らしい。今年で六百八十二歳になるそうだ。
あらゆる寿命の問題を魔術で解決して生き続けている化け物だ。
おそらく生体系の魔術師なのだろう。
彼が死んだときがライムラントの最後の日かもしれない。
「……ふうん」
たったいま本で仕入れた知識を賢しげに語ってみた。
さっきからどの本をとっても考察は客観的で感情の入る余地がない。よほど優秀な作者が書いているのだろう。この本を書いたガルウィングとやらには一度会ってみたいものだ。
『帝国史』の本を棚に戻す。
歴史書に飽きてきたので娯楽本でも読もうかなと思い、上下稼動小室に行く。八階のボタンを押すとゴーと音を立てて上の滑車が魔力を動力に回転、太い紐で繋がった小部屋を上に引き上げる
適当な本を一冊手に取り、窓際の陽のあたるとこに座って読んでいると、歩き方が他とひどく違う少年が俺の斜め後方九メートルからやってきた。視界外の情報はシャルルの『雷凱波』を参考に空気の揺れを感知する術式を組んでみたから得られたのだが、伝わるのが遅くて戦闘には使えないな。これ。
「……」
俺は本を閉じた。跳躍する。窓をぶち破って向かいの民家の屋根に、風を噴射して衝撃を緩めながら着地。一刹那遅れて、なにかによって破壊された、俺の座っていた椅子と机の残骸が追随する。物理的な破壊力を持った術式は風、水、土、鉄の四つ。水平方向への風系の魔術では「破壊」は難しいし、鉄系は比重が大きいせいで射出することが苦手（狙窪除穿都撃などは数少ない例外）で、大質量を展開しなければ大きな破壊はできないし、大質量を展開すれば流石に攻撃前にもっと大きな空気の揺れを感じたはずだ。それにアゼルのような魔王でもない限り、刃を生み出して斬ったほうがよっぽど効率がいい。十中八九、土属性か水属性のどちらかに属する魔術

だろう。

剣を抜き、八階の窓を見下ろす。

フードを被った少年が俺を見下ろす。害虫を見るようなひたすら無機質な目だった。唇が動いたので『聴爾覚』を使うが「ぽいうyｔれwqlkjhgfd」意味不明な音を拾うだけだった。

少年の背後から九筋の「流臥水（リグレ）」が展開、内部で高速流動する蛇のように細い水の鞭が上と左右に分かれて俺に迫る。

「下級魔術の九重発動だと？！」

いくらライムラントが魔術研究の盛んな土地だとしても、人間の限界値を軽く超えている。「ガンドラに吹く殺戮する風」らしい俺でも四重発動が限界なのだ。

悪魔か……？

考えている暇はなかった。迫る鞭を『速離源力』で風を噴射し後方に跳躍して逃れる。俺を見失った鞭が屋根の上に無数の穴を開ける。空中の鎌首を擡げ、再度飛翔。こんな街中でやるってか？　時間さえ稼いだらライムラントの守備部隊が片付けてくれるだろうが。

「……」真下を見下ろすと一般人がわけもわからず俺たちを見上げている。早めに制圧したほうがいいだろう。

あちらも長期戦をする気はないらしく、『流臥水』の一つに足を乗せ、水の鞭に乗って間合いを詰めてくる。空中戦には風属性の俺のほうが有利なはずだが、悪魔を相手にはその手の常識は通用しないと思ったほうがいいか。そもそも『流臥水』に乗って高速移動するなんて俺は聴いたことがない。

網の目のような水の合間を抜ける。

速いのは速いし立体的な攻撃ではあるが、アゼルの『鉄脅槍』ほどの速さではないし、リグムのような波状攻撃でもない。空中で自由に加速、減速できる俺にとってはそう辛い攻撃でもない。

水属性の特徴は八属性でも最大級の攻撃力を持つことだ。しかしそれと裏腹に防御力と機動力が皆無に近い。間合いに入ってしまえばこっちのもの！　俺は喉元に向けて剣を突き出した。

少年が水の軌道から吹き飛んだ。八階の高さから落下する。フードが剥がれ、藍色の髪が宙を舞う。引き換えとして俺の剣が折れた。

「……は？」

水の鞭が四方八方から襲い掛かってくるのを真上に風を噴射し、下方へ加速。少年を追う。

前述の通り、水属性には防護術が存在しないはずだ。なら剣が折れたのはなぜだ？　超高速で回転する水の刃で切られた？　いや、たしかに硬い物を突いた感触があった。手首が痺れている。少年の喉は硬化して切断力に抗ったのだ。となると回答は一つ。

（自分の体を凍結させて斬撃を防ぎやがった……！）

人間がやれば凍結した細胞が壊れて修復不能になる。人間は思いついてもできない。触れたものを瞬間凍結させる水属性氷結系下級『凍事傷（トルセウ）』を用いた悪魔ならではの防御だった。そして近接戦闘に憂いがなくなってしまえば水属性の攻撃力は、やばすぎる。

鞭が垂直に伸びた逆向きの瀑布に変化。三百六十度、俺を包囲する。掠められた民家の屋根が俺の前方で塵になる。三百メガパスカルほどの高圧で水を噴射すると鋼すら斬りとばす刃ができあがる。水属性中級『水削蓬断神（スラシレン）』だがこれほどの大規模展開できる術士を俺は知らない。あと数秒で隙間が閉じられ俺は死ぬ。

だがどんな攻撃魔術でも術者を殺せば止まる。そして速度の領域で風属性に勝る魔術は、雷の他に存在しなかった。俺は『速離源力』の速度のまま折れた剣を叩き付けた。『凍事傷』のよる防御を行おうとした少年の目が驚愕で見開かれる。剣は柔肌に深く食い込んでいた。

沸点と融点は気圧によって変化する。高気圧化では分子の動きが押さえつけられ融点が低くなり、沸点が高くなる。低気圧化では逆の現象が起こる。

風属性中級『気散絶息圧（キサゼイツ）』の術式が空気を周囲に吹き飛ばし、限定空間内の気圧を引き下げたのだ。低気圧化では充分な硬度を得られる分子結合が起こらずに鉄が皮膚を突き破った。ちなみに『気散

絶息圧』は本来空気中の酸素量を減らし相手を窒息させるための術式だ。その意味では悪魔の強靭な細胞群の活動を鈍らせるには至らない。

「が、ぐっ」

くぐもった悲鳴を合図に周囲に形成されていた刃の瀑布が崩れる。鮮血を散らせながら落ちていく。あとは『気計璃嶺流』を叩きつけて終わりだ！　術式を紡ぎながら落下。地面に激突——、「?！」

しなかった。本来整えられた土の道があるはずの通りの地面には、真っ黒い大穴が開いていた。現存する最大の魔物であるサーペントウエールの直径六メートルある大口を思わせる。

「うわあああ?！」

逆噴射で逃れようとするが、さっきまで全力で順噴射していたため簡単には止まらない。無理矢理止めようとすれば慣性が俺の体を押し潰す。

俺と悪魔の少年は黒い穴に呑まれた。

逆噴射して落下を止めたときには、穴は塞がってしまっていた。閉じ込められたようだ。しかしなんだこの穴は？　土系で底なしの奈落を作ったのだろうか？　だがそのうち落下している感覚がなくなってきてそれが否定される。腹に大穴を開けた少年がプワプワ浮かんでいる。血が空中を漂う。俺も速度が死んだあたりで噴射をやめる。『気計璃嶺流』でトドメを刺そうかと思ったが、発動しなかった。どうやら『風』がないらしい。呼吸ができているということは、空気はあるのだろうか？　重力も仕事していないような場所だ。心底、意味がわからない。

と、突然光が飛び込んできた。

白い部屋の、椅子の上に飛び出す。大きな円卓。窓からは太陽の強い光と、空。正面に銀色の毛並みをしたドグル族の子供が座っていた。無表情なガキだった。なんだか突然、痛烈な頭痛に襲われる。幾つかの記憶が断片的に再生されてむちゃくちゃ気分が悪くなる。椅子に深く体を預けて倒れるのを阻止する。フラッシュバックしたのは目の前のガキが無表情で人間を切り刻んでる光景だった。

「ルピス大海の、首落としの鎌……？！」

異大陸からの侵攻してきた四千隻の船をたった一人で沈めた、ガルドメイス獣共和国の天才児。

「またこれ級の魔術師か」

右手から声。

中年ほどのおっさんが机に肘をついて掌で顎を支えている。

「ああ、私はお前のことを知っているが、お前は私のことを知らんか。マクルベス＝パラス＝サルファーミストと言う。あるいは『アルバースの平和主義な破滅』と言えば理解できるか？」

「……おいおい」

このおっさんが、王国からアルバース領を任された公爵が勝手に

国を名乗りだし分離したアルバース公国の戦線をたった一人で支える病毒士。数百キロ先の軍隊に伝染病を正確に宛がう恐るべきリーチを誇るマクルベス＝パラス？

そのもう一つ奥にいる魔術師にも見覚えがある。褐色の肌をした、ニヤニヤと嫌な笑みを浮かべている青年。間違いなくヨゼフ＝イトイートイット＝ヨンムンガルドだ。周囲を王国領の国に囲まれて通行上重要な地点であるがために何度となく軍を出されながら悉く退け、ついに単なる属領としてでなく自治区であることを認められながら王国に属することになったパピュスの魔術師だ。その立役者である『パピュスの砂の魔物』の異名を、王国軍に身を置くもので知らない者はいない。

『首落としの鎌（ネックフォールサイス）』に、『平和主義な破滅（アンブレイカー）』、それに『砂の魔物（サンドウォーム）』だと？

大陸中の最強の魔術師共が勢ぞろいじゃねぇか。

「空席は三つ。この馬鹿げた面子を揃えた主と、水を使う悪魔の子供を勘定にいれると連れてこられるのはあと一人かな」

ヨゼフが乾いた唇を舌先で湿らせる。キレてるときの癖だった。相変わらず沸点が低い。愉快そうに語ってそれを誤魔化すのも変わっていない。

「ここにいないのであと可能性がありそうなのは、ナイトロールかシャルトルーゼのキャルトかな。アイバ、君はどう思うよ？」

「アイバ？　それはガーレ＝アーク＝ソードフィールドではないのか？」

マクルベスが口を挟む。

「え、君がそうなの？　あの殺戮する風（キリングフィールド）？　うそん。ちょっと憧れてたのに、イメージ崩れた……」

なんだかひどい言われようだった。

「あんたらも、黒い穴に吸い込まれてここへ来たのか？」

ヨゼフもマクルベスも、疲れたような息を吐いた。その話は散々

したあとなのだろう。
「ああ、その通りだ。いつのまにかこの訳のわからない空間に追いやられた」
「よく喧嘩しなかったな」
「外を見てみろ」
促されて椅子から立つ。
外は、どこまでも蒼が広がっていた。海と空が水平線で連なっている。雲だけが白い。
「知っての通り魔術師に越えられぬものが二つだけある。時間と、空間だ。私にはもちろん、首落としの鎌にも砂の魔物にも真似はできない。ならば我々で争っても無駄だろう」
特におもしろくもなさそうに言う。
「オレが恐いんだろ」
『首落としの鎌』が鼻を慣らす。
「そうとも言うな」
言葉と裏腹にマクルベスのおっさんは余裕そうだった。
と、ヨゼフと『首落としの鎌』の間の席が白く発光した。やはりというべきか、あの光は魔術の発動光らしい。
一際強く光を放ったあと、真っ黒な大穴が開く。あれはその場の光を全部吸収しているせいで黒いのだろうか。
そこに一人の人間が現れる。
それはキャルト族の女だった。全身を薄い体毛に覆われていて耳が丸くてふさふさだ。橙色の髪で目つきはきつい。体つきは細いが、無駄のない筋肉のつき方をしていた。悪くいえば貧乳。俺は思わず両掌で机を叩いて、膝の裏で椅子を蹴った。
「シャルル?！」
多分俺はそのときひどく間抜けな顔をしていただろう。当たり前だ。死んだと思っていた人間を目の前にしたら、誰だってそんなもんだ。
「へえ。キャルトのほうか」

ヨゼフの温度のない声が俺の興奮を少しだけ冷やす。

当のシャルルは「ここは……？　お前らも黒い穴に呑まれたのか？」と俺とほぼ変わらないリアクションをしている。

ヨゼフとマクルベスが同じようにうんざりしている。

「さて、そろそろ役者が揃ったんじゃないかと思うんだけど、何が起こるのかな」

残った二つの椅子が、一際強烈に光る。そして次の瞬間には、二体の悪魔の姿が顕現していた。片方は俺を襲った、あの藍色の髪のガキで、腹にはまだ風穴が開いている。

もう一人は何もかもが白い女。虹彩のない瞳が異常に不気味だった。視線が女に集う。

「いろいろと説明してもらわなければならないことがあるようだが」

女が頷く。

「あなたたちがみんなこの大陸で指折りの魔術師だというのは、顔を付き合わせた時点でわかっているなり。あなたたちを集めた理由は、魔王を殺すためなり」

……この話に登場する女は全員空気をぶち壊すキャラクターをしているのだろうか。

「魔王を殺す？　何を言ってる？　お前自身も魔王だろ」
ヨゼフの言う通りだった。転移魔法なんて人類はまだ到達できていない。時間と空間は「魔術師」には越えられないのだ。そんな魔術を使えるのは魔王以外にありえない。白い女は頷く。
「そうなり。わらわは序列第四位の悪魔なり。名前はククロレノクインククーフククレットなり。『ありとあらゆる場所』の異名を持っているなり」
ありとあらゆる場所……？　それが俺達を一瞬でここに連れてきた魔術なのだろうか。
「おい、そのふざけた喋り方をやめろ」
ヨゼフが言う。ククロレノが雷鳴に打たれたような表情になる。
「ふざけた喋り方ってなんのことなり……？　言語はアゼルに習ったなり。まさかあいつ、わらわに下品なことを吹き込んだなり？！」
机に手をついてカタカタ震えだす。よっぽどショックだったのか、色のない肌が赤く染まっている。
「あー……、えっと、」
話が進まなそうだったので口を挟む。
「序列四位って言ってたよな？　魔王ってのは何人いるんだ？」
「いまお前たちの大陸にいるのはわらわとこの子を含めて八人なり。そしてそのうち、七位アゼルアグアアアグオンと五位レトレレットレルレレスレレレクル、三位ジギギギアギギガガガギゾに六位ワークワワルワイワワークワークが倒され、残りは四人なり」
円卓の一部が砂になった。
「……こうなりたくなかったらまじめに話せ」
沸点を超えたヨゼフが魔術を使ったのだ。分子組成の僅かな隙間に魔力を浸透させ、膨張させて破壊する。
たしか「コナゴナ」と当人は呼んでいた。

「な、なぜなり？　わらわなにか妙なことを口走ったなり？！」
「あの、とりあえずその“なり”ってのをやめるとこから始めようか」
面倒ながらフォローをいれると軽く涙目になりながらククロレノが頷く。
「わらわとこの子を除けば二人、魔王共の侵攻は実はこの数年ではとんど失敗しているな……失敗している」
困ったように俺を見る。多分語尾がこれでいいのか気になってるのだろう。頷いてやると安堵の息を吐いて続ける。けったいな魔王だな。
「残りは第二位『ありとあらゆる光』たるカサナカラカラフカカロートと、『ありとあらゆる刃』たるルピルルッルルルルールメイル」
「……待て。いまなんて言った？」
ヨゼフが口を開いた瞬間にククロレノがびくんと肩を震わせる。
ヨゼフに怯えきっている。あの端整な顔でにらまれると若干萎縮する気持ちはわからなくもないが、魔王なのにそれでいいのか？
「ルピルルッル……、ああ、人間風に名前に区切りをつけたほうがわかりやすいなり……、ごめん、いまのなし。区切りをつけたほうがわかりやすい」
語尾がそこで終わるのも変なのだがいい加減疲れてきたので指摘しない。マクルベスのおっさんが隣で愉快そうに笑う。
「ルピルルッル＝ルルルール＝メイル、異名はありとあらゆる刃」
……おそろしく聞き取り辛い名前だな。
魔王共は共通して同じ発音を幾つも重ねる名前を持っているらしい。ククロレノにルピルルッル、カサナカラにジギギギア。舌を噛みそうな名前ばかりだ。
「ジギギギアと戦ったことのあるアイバはわかると思うけど、二人とも、とても人間が単独で敵う相手ではない化け物」
俺は歯を噛む。第三位らしいジギギギアでも王国軍が総出でぶつかって、それを圧倒する戦力の持ち主だった。知ってるやつらが何

人も死んだ。
それ以上の序列を持つ魔王だ。
「だから我々を集めたと？」
マクルベスが言う。
「その通りなり」
ククロレノが笑みを見せる。
「あなたたちは人間族ではたぶん最強の戦士達、五人も集まればばきっと倒せる」
「話にならんな。帰らせてもらおう」
マクルベスが席を立った。周りは海だ。どうやって帰るつもりなのだろう？
「なぜ？」
「アルバースは小国なのだ。私がそんな雑事にかまけている間に王国や北のアイスログに滅ぼされてしまう」
大陸を脅かす魔王の討伐を雑事、な。
「つまりあなたはその国がなくなれば協力してくれるなり？」
「……なんだと？」
「なら早速滅ぼすなり。ヒュｈｌｉア、あｓｄｆｇｈｊｋｌ」
人間のものではない発音でなにかを言った。
ガキがほうが無機質な目で窓の外を見る。つられて視線をやると、海が垂直に広がっていた。数キロに渡って瀑布が伸びる。海水を圧倒的な魔力で持ち上げたのだ。
「これをわらわのありとあらゆる場所で転送するなり。小国なら一発なり。えっと地図は……」
「貴様……！」
マクルベスが犬歯を覗かせる。目は冷静なままだが、頬肉が烈火の怒りを押さえつけているせいでピクピクと上下する。
「そんなに怒らないでなり？　あ、知らないなり？　人間って多少殺してもほっとけば増えるなり」
語尾とあいあまって恐ろしく軽い響きで言い放つが、それは人間

がどうでもいい異種族を見るときと同じ理屈だった。人間族への虐殺を、それも自分の愛国の人々に同じ理屈が適用できるはずがない。
マクルベスの右手が毒属性の紫色に発光。細菌やウイルスの類を司る『病毒士』の技は、不可視で、しかも呼気だけでなくあやゆる粘膜や、皮膚からですら入り込むものがある、厄介極まりない魔術だ。長年王国を苦しめ続けているマクルベスの毒がどんなものなのか若干の興味があるが、おそらく人間への病気類は悪魔に通じないだろう。免疫機構の桁が違うのだ。溶毒系の魔術も同じ。強靭な細胞群を溶かしきることは、『王腐瑠覇水』でもなければ難しい。毒属性は悪魔に対して相性が悪い。
と、俺は思っていた。
「《忌み枯らし》？　人間がよくもそんな術式を……」
視認できないので効果はわからないが、ククロレノの表情はそれに対して怯えに似た色をしていた。悪魔には悪魔で天敵のような病気があるのか。
「目的が見えにゃいのだが、」
一触即発の空気を止めるためかはたまたマイペースなだけか、シャルルが言う。
「私は協力してもいいと思っている」
良識派が一人でも居て助かった！
「そしてククロレノ、お前が力で我々を従えようというなら私はお前を殺す。私の雷はお前の転移より速い」
両手を広げてバカ騒ぎの間に展開した『雷撒藺擦走鳴』を開いて見せる。秒速三十万キロメートルの雷はこの場にいる誰のどんな攻撃よりも速く、二億ボルトにも及ぶ雷撃に焼ききれないものなど存在しない。
悪魔のガキが乞うようにククロレノを見る。ククロレノは首を横に振ると、窓の外からゆっくりと水が落ちていくのがわかった。
マクルベスが展開しかけた《忌み枯らし》だとかいう術式を引っ込める。

「それと火種が一つ収まったところにもう一つ投げかけてしまってすまにゃいが」
……ん？
「ゼルド＝レクス＝マテリアルブレイド。私は人狼と共に戦う気はにゃい」
シャルルが言い切った瞬間に鋼色の殺意が空間に充満した。
「よく聞こえなかったな。いまなんて言った？」
静観を決め込んでいた「首落としの鎌」が血走った目を剥いて鈍色の発動光を体中に展開している。空気が痛い。殺意が魔力となって迸り、ごくごく微細な鉄の刃を構成しているからだ。
もうやなんだけどこいつらとこの場所にいるの？！
そういえばライムラントで読んだ本の中にガルドメイス獣共和国、つまり高い知能を持った獣の国にはドグル族が深い関わりを持ち、キャルト族は群れるのを嫌ってガルドメイスには参加しなかった。キャルトは高い戦闘能力と知性を併せ持つ一族で、ガルドメイスに決して敵対はしなかったが、ガルドメイスに参加しなかったことを「敵対行動」と捉えたドグルはキャルトを弾圧した歴史があるんだとか。
それにドグル族に「人狼」は禁句だ。彼らは狼の血族であることに深い矜持を持っている。「狼」の上に「人」が来るなどという言葉は存在自体が彼らに対する侮辱なのだ。
中身がガキすぎるのになまじ強すぎる力を持ってるから手に負えない！　この場で一番強いのは多分ゼルドだが、全員が全員、国家戦略級の魔術師なだけにただの喧嘩が喧嘩で済まない。
「その無駄に大きな耳は飾りか？　もう一度言ってやろうか。人──」
「そのへんにしとけよ……」
愚痴るように俺が溢した一言で、シャルルが続きを止める。
「……私はドグルを許す気はにゃい」
とだけ言って雷を納める。

ゼルドのほうはシャルルを餓えた狼より危険な目でじっと睨んだままだ。目は沸騰するような殺意で濁っている。
「ガーレ＝アーク、お前はどうなんだ」
「あ？　面倒だからやだ。魔王とやらに俺が狙われたわけじゃないし」
「そういうだろうと思ってお前には報酬を用意してある」
「……報酬？」
クロレノが両手の間に球形の発動光を作り出す。球形の光がテーブルの中央まで移動。光の中に左腕がなく、肩のあたりが包帯にくるまれて、それがそのまま乳を隠している、上半身裸で赤髪の女が見えた。
「ろ、ろ、……」
驚きすぎて、言葉がでない。
「あ、やっほーです。アイバ様。あっはっは。ご心配おかけしました ー」
そこにいたのは、ロットウェル＝ウィンザードだった。
「それがあなたへの報酬」
「……捕らえたのか？」
「人聞きの悪い言い方をするな。死にかけていたそいつをわらわの空間に移動させただけ。むしろ助けたと解釈する」
「少し、二人だけで話をさせてくれ」
「わかった。入り口を広げる。中に入る。用が済んだら、壁面を三回叩くようにする」
「……覗くなよ？」
「覗かない。それくらいの礼儀はある」
全然信じる気はなかったが、俺は広がった光の口に入った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3867t/

悲鳴と共鳴と汚れた魔剣

2011年11月20日03時13分発行